

(財) 広島市文化財団発掘調査報告書 第11集

可部寺山1号遺跡

—広島市安佐北区可部町所在—

2004

財団法人広島市文化財団

は し が き

広島市安佐北区の可部地区は、中国山地に流れを発した太田川がまさに下流の平野部にさしかかる場所に位置しています。このあたりは、太田川の上流と下流、また山陽と山陰とを結ぶ交通の要衝として古くから発展し、現在でも本市北部方面の中核となっています。このたび公園整備事業に先立って発掘調査を行った可部寺山1号遺跡は、この可部市街地を一望できる寺山という丘陵上に位置しており、この地域では従来あまり明確にはなっていなかった古墳時代前半期に属する古墳や山城跡以外の性格を持った中世遺構が新たに発見されて、歴史の空白を埋めるための大変貴重な情報源となりました。

本遺跡のある高台に立つと、可部の平野部から遠くは太田川下流域までも見晴らすことができます。このような場所を終焉の地あるいは神聖な儀式の場として選んだ古の祖先たちに思いを馳せ、かけがえのない郷土の歴史への理解を深めるために、本書をご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本調査にあたってご指導、ご助言をいただきました諸先生方、ご協力いただきました関係諸機関・関係者の皆様並びに炎天下や寒空のもと発掘作業に従事していただいた臨時作業員の方々に厚くお礼申し上げます。

平成16（2004）年7月

財団法人広島市文化財団

例 言

1. 本書は、広島市安佐北区可部町大字上原字寺山地内における公園整備事業に伴い、平成14年度と平成15年度に実施した可部寺山1号遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、広島市安佐北区役所農林建設部維持課から委託を受け、財団法人広島市文化財団が実施した。
3. 本書の執筆は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ－B、C・Ⅳ－2を稲坂恒宏・松田雅之が、Ⅲ－A・Ⅳ－1を高下洋一が分担して行い、高下が編集した。
4. 遺構の実測及び写真撮影は、高下・稲坂が実施した。遺物の実測・写真撮影及び図面の製図は、高下が実施した。
5. 本書に掲載した航空写真の撮影は、スタジオ・ユニに委託した。
6. 基準点測量は、復建調査設計株式会社に委託した。
7. 本書に掲載した挿図の方位は、第1図を除きすべて座標北である。座標は日本測地系に基づく平面直角座標第Ⅲ系による。
8. 水平基準は海拔高であり、T.P.（東京湾平均海面標高）による。
9. 第1図は、国土交通省国土地理院発行の25,000分の1の地形図（可部・飯室・中深川・祇園）を複製して使用した。
10. 本書に使用した遺構の略記号は下記のとおりである。

S K：土坑
11. 土層断面図及び土器の色調は、日本色研事業株式会社『新版標準土色帖（21版）』（1998年）によった。
12. 本発掘調査の調査記録及び出土遺物は、広島市教育委員会からの委託を受けて、財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課において保管している。
13. 本発掘調査は、平成14年度に可部寺山1号遺跡と可部寺山第2号古墳、平成15年度に可部寺山第1号古墳を調査対象として実施したものであるが、結果として第1号古墳は欠番とし、可部寺山第2号古墳及び可部寺山1号遺跡内で確認された第3号古墳、第4号古墳並びに平成15年度に確認された遺構を合わせて可部寺山1号遺跡として報告するものである。

目 次

I	はじめに	-----	1
II	位置と環境	-----	3
III	遺構と遺物	-----	9
IV	ま と め	-----	30

遺物観察表

第1表	瓦質・土師質土器観察表	-----	23
第2表	銅銭観察表	-----	23
第3表	鉄釘観察表	-----	23

図版目次

図版扉	可部寺山1号遺跡航空写真	
図版1	a 可部寺山1号遺跡航空写真	
	b 可部寺山1号遺跡航空写真	
図版2	a 可部寺山1号遺跡平成15年度調査区航空写真（調査前）	
	b 可部寺山1号遺跡平成15年度調査区航空写真（調査後）	
図版3	a 可部寺山1号遺跡平成15年度調査区遺構確認状況	
	b 可部寺山1号遺跡平成15年度調査区遺構完掘状況	
図版4	a 可部寺山1号遺跡平成14年度調査区航空写真（調査前）	
	b 可部寺山1号遺跡平成14年度調査区航空写真（調査後）	
図版5	a 可部寺山第2号古墳（調査前）	
	b 可部寺山第2号古墳（調査後）	
図版6	a 可部寺山第2号古墳（調査後）	
	b 可部寺山第2号古墳埋葬施設内出土遺物	
図版7	a 可部寺山第2号古墳埋葬施設（調査後）	
	b 可部寺山第2号古墳埋葬施設出土遺物（一部）	
図版8	a 可部寺山第3号古墳（調査後）	
	b 可部寺山第3号古墳埋葬施設	
図版9	a 可部寺山第3号古墳埋葬施設出土遺物（一部）	
	b 可部寺山第4号古墳埋葬施設確認状況	
図版10	a 可部寺山第4号古墳埋葬施設確認状況	
	b 可部寺山第4号古墳埋葬施設（調査後）	

- 図版 11 a 可部寺山 1 号遺跡焼成施設跡
- b 可部寺山 1 号遺跡焼成施設跡出土遺物（一部）
- 図版 12 a 可部寺山 1 号遺跡焼成施設跡（調査後）
- b 可部寺山 1 号遺跡窯跡状遺構
- 図版 13 a 可部寺山 1 号遺跡窯跡状遺構（調査後）
- b 可部寺山 1 号遺跡窯跡状遺構土層
- 図版 14 a 可部寺山 1 号遺跡 S K 1（調査後）
- b 可部寺山 1 号遺跡平成 15 年度調査区（調査後）
- 図版 15 出土遺物（1）
- 図版 16 出土遺物（2）
- 図版 17 出土遺物（3）
- 図版 18 出土遺物（4）

挿 図 目 次

第 1 図	可部寺山 1 号遺跡周辺遺跡分布図 -----	5
第 2 図	可部寺山 1 号遺跡周辺地形図 -----	8
第 3 図	可部寺山第 2 号古墳地形測量図（上；調査前・下；調査後） -----	10
第 4 図	可部寺山第 2 号古墳土層断面図 -----	11
第 5 図	可部寺山第 2 号古墳埋葬施設実測図 -----	12
第 6 図	可部寺山第 3 号古墳・第 4 号古墳地形測量図 -----	14
第 7 図	可部寺山第 3 号古墳埋葬施設実測図 -----	15
第 8 図	可部寺山第 4 号古墳埋葬施設実測図 -----	17
第 9 図	可部寺山 1 号遺跡平成 15 年度調査区地形測量図（調査前） -----	18
第 10 図	可部寺山 1 号遺跡平成 15 年度調査区地形測量図（調査後） -----	19
第 11 図	可部寺山 1 号遺跡 S K 1 実測図 -----	19
第 12 図	可部寺山 1 号遺跡平成 15 年度調査区土層断面図 -----	20
第 13 図	可部寺山 1 号遺跡焼成施設跡実測図 -----	22
第 14 図	可部寺山 1 号遺跡 S K 2 実測図 -----	24
第 15 図	可部寺山 1 号遺跡窯跡状遺構実測図 -----	25
第 16 図	可部寺山 1 号遺跡出土遺物実測図（1） -----	26
第 17 図	可部寺山 1 号遺跡出土遺物実測図（2） -----	27
第 18 図	可部寺山 1 号遺跡出土遺物実測図（3） -----	28
第 19 図	可部寺山 1 号遺跡出土遺物実測図（4） -----	29

I はじめに

広島市教育委員会（以下「市教委」）は、平成13年1月9日に広島市安佐北区役所農林建設部維持課（以下「安佐北区役所」）から、寺山公園予定地内における埋蔵文化財の有無並びに取り扱いについて照会を受けた。市教委はこれを受けて、同年2月7日から28日まで事業地内の試掘調査を行った結果、古墳2基及び土坑1基が存在することを確認し、同年5月8日にその旨を安佐北区役所に回答した。以後、この遺跡の取り扱いについて両者は協議を重ねたが、計画の変更は難しく現状保存は困難との結論に達し、発掘調査を実施し記録保存の措置を講じることとなった。

さらに協議の結果、本遺跡の発掘調査は2箇年計画で実施することとなった。そこで安佐北区役所は、まず平成14年6月24日に財団法人広島市文化財団（以下「文化財団」）に対して、安佐北区可部町大字上原字寺山617・639-1・640-6及び甲618に所在する可部寺山第2号古墳及びその周辺を調査対象として発掘調査を依頼した。これを受けて文化財団文化科学部文化財課（以下「文化財課」）では、同年7月24日から11月16日まで現地調査を実施した。さらに翌平成15年5月26日には、安佐北区役所は寺山639-1及び甲618に所在する可部寺山第1号古墳を対象として発掘調査を依頼し、文化財課は同年7月22日から12月24日まで現地調査を実施した。報告書の作成は、平成14年11月から平成15年7月にかけてと、平成15年12月から平成16年7月にかけて実施した。

発掘調査の関係者は、下記のとおりである。

調査委託者	広島市安佐北区役所農林建設部維持課
調査主体	財団法人広島市文化財団
調査担当課	財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課
調査関係者	桑野克彦 常務理事 東山章次 常務理事（平成15年度） 井川 實 文化科学部長（平成14年度） 沼田眞之輔 文化科学部長（平成15年度） 石田彰紀 文化財課長 若島一則 文化財課主任指導主事 波田秀穂 文化財課主任
調査担当者	高下洋一 文化財課学芸員 松田雅之 文化財課学芸員（平成14年度） 稲坂恒宏 文化財課学芸員（平成15年度）

調査補助員（50音順）

（発掘調査）	植木真澄 大塚勝宏 梶谷ミエコ 川手京子 久保田弘子 高本すがこ 宅見陽子 坪木征子 前田晴美 森田美恵子 横光美里
（整理作業）	酒本由理郁 菅原彰子 住川香代子 橋本礼子

なお発掘調査を進めるにあたっては、広島市安佐北区役所農林建設部維持課、広島市教育委員会

生涯学習課文化財担当及び財団法人広島市ひと・まちネットワーク広島市可部公民館の職員の方や、地元町内会をはじめ多くの方々に多大なご配慮とご協力をいただいた。さらに、調査の過程や報告書作成に際しては、当財団埋蔵文化財発掘調査指導委員会委員である広島大学名誉教授潮見浩先生、同川越哲志先生、同河瀬正利先生及び広島大学大学院教授古瀬清秀先生の諸先生方や、是光吉基氏からは貴重なご助言、ご指導をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

Ⅱ 位置と環境

1. 自然的・地理的環境

可部寺山1号遺跡は、広島市安佐北区可部町大字上原字寺山に所在する。

本遺跡の位置する可部地区は、広島市街の中心部から北北東へ約15kmの位置にあり、中国山地の冠山に流れを発して芸北地方を概ね西から東へと流下してきた太田川が、その向きを南へと大きく変える付近にあたっている。この太田川の北岸には、本流である太田川と支流の根谷川・大毛寺川の3河川によって形成された沖積平野が広がっており、本地区の中心街はその平野部の東寄りに位置している。また、根谷川やその支流の南原川・桐原川沿いには、幅の狭い谷底平野が続いている。これらの河川沿いは古くから主要な交通路とされており、根谷川筋には三次や山陰の松江方面へ続く近世の雲石往還が、南原川筋には浜田方面へ抜ける石見往還が、また大毛寺川筋には山県郡都志見へと通じる庄原往還がそれぞれ通っている。一方、沖積平野周辺の山地に目を転じると、市街地北西の福王寺山（標高496.2m）や北東の高松山（標高339.0m）といった北方の山塊の大部分は軟質の花崗岩地帯であり、風化作用によって傾斜が緩く、山ひだが小さくて小規模な谷が多く刻まれるという比較的穏やかな山容を呈している。これに対して、本地区の東方に位置する白木山（標高889.3m）山塊や、西の太田川に沿う螺山（標高475.0m）、水越山（標高526.0m）等は硬質の流紋岩類や古生層からなるため、前者とは対照的に急峻で山ひだが大きい（赤木1976）。また南方の太田川対岸には、阿武山（標高586.4m）から北方向に派生した副峰が大きく迫っている。太田川はその裾を取り巻いて流路を東向きから南向きへと大きく転換し、本地区から約3km南方の地点で根谷川・三篠川の2支流を加えて下流へと向かう。この合流地点付近では、兩岸の丘陵地帯が川岸間近にまで迫っており、太田川三角州を含めた下流の広大な平野部と本地区とはこのあたりで分断されている。以上のように本地区は、平野部に隣接した小盆地状の地形であり、さらには大小河川の集合地点を近くに控えた利便性の高い地域といえることができる。

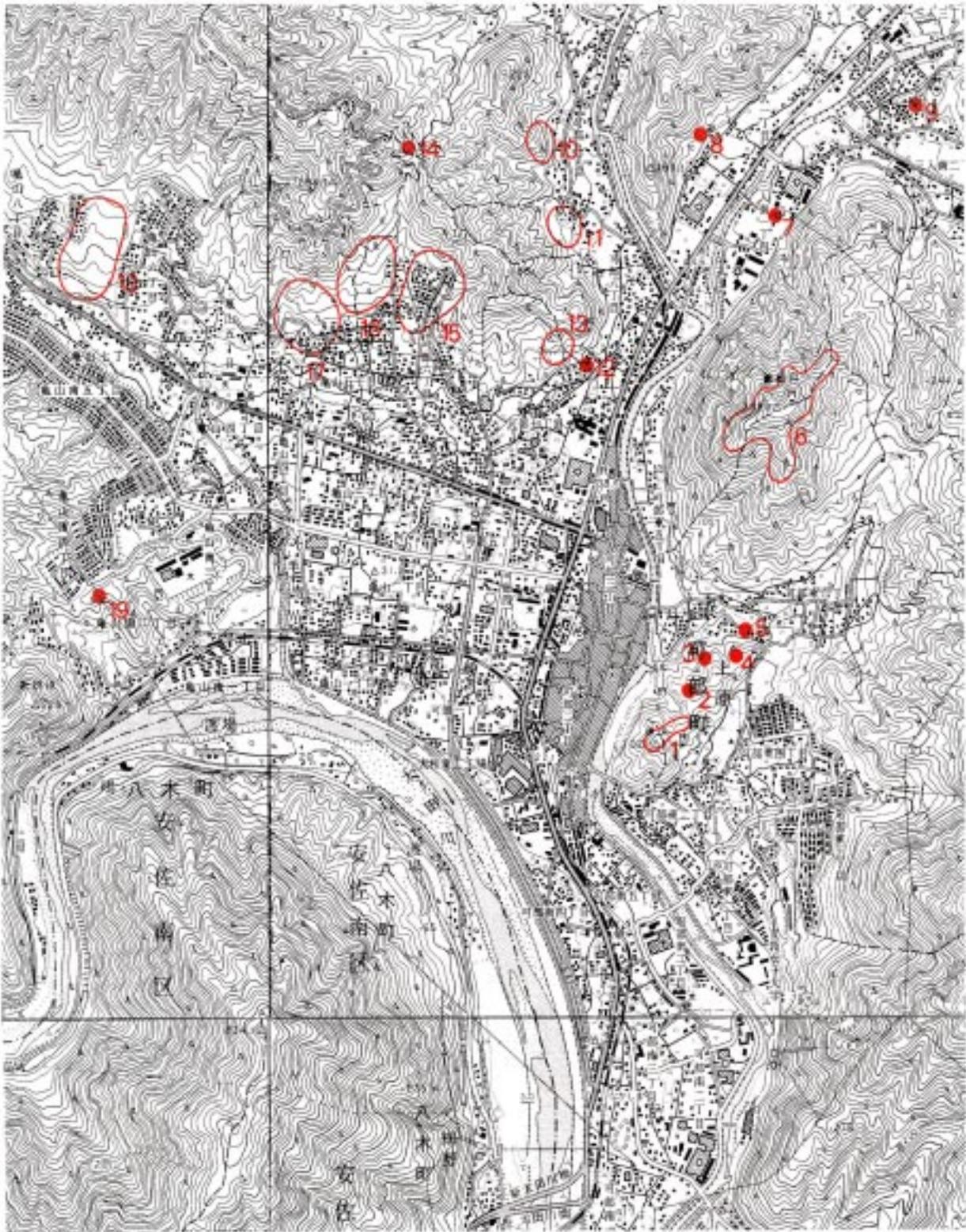
本遺跡が所在する寺山は、この可部平野部の東縁で高松山山塊の南西に位置する独立した低丘陵である。丘陵の西裾直下には根谷川が北から南へと流れ、その西側には可部の市街地が広がっている。丘陵周辺は概ね東から西へと下る緩傾斜地で、宅地や水田・畑作地等の耕作地として利用されている。丘陵の主な稜線はほぼ北東-南西の向きに通っており、また山塊は中央の小規模な谷筋を境に北東側と南西側に大きく二分されている。南西半側のほぼ中央に標高約106mの最高所があり、最高所と麓との比高は75m内外である。本遺跡は、この丘陵南西半側の最高所一帯と、そこから北東側へ少し下った尾根筋上に位置している。最高所付近を占める第1号古墳から周囲を見渡すと、北側と東側は高松山や白木山山塊に阻まれて視界は狭いが、西側は可部平野部全域はもちろん遠く大毛寺・勝木方面まで、また南側は現在高陽ニュータウンとなっている太田川東岸の広大な低丘陵地帯から、時には広島市街の高層ビル群までも見通すことができる。こうしたすばらしい眺望の得られる当地点は、本地区に関わった領主階層の人々の墳墓地としてまことにふさわしいといえよう。

2. 歴史的環境

本地区では、現在までのところ旧石器時代の遺構や遺物は確認されていない。縄文時代では、数箇所の遺跡から石器や土器等の出土がみられるが、いずれもわずかな数にとどまっている。続く弥生時代では、造成工事中等に土器や石器等が見つかった事例が多い。出土した土器片の大半は弥生時代後期の特徴を示しており、それ以前の遺物の少なさとも考え合わせると、この時期になって多くの人々が本地域一帯で生活を営むようになったことが伺える。しかしながら、住居跡や耕作地跡といった生活や生産を物語る遺構は確認されていない。一方、墳墓の遺構としては丸子山遺跡（石田 1991）・番谷遺跡（宮田 1997）及び可部寺山 2 号遺跡（島軒・鎌田 2004）があり、いずれも発掘調査が行われている。丸子山遺跡は根谷川東岸の丘陵上に位置しており、弥生時代中期から後期にかけて営まれた集団墓と考えられている。調査では 15 基の箱形石棺が確認され、石棺内には 8 体分の人骨が残存していた。番谷遺跡は、福王寺山から南東方向に伸びる尾根上に立地する後期の墳墓群で、箱形石棺 8 基と土壙墓 1 基から構成されている。また可部寺山 2 号遺跡は、寺山丘陵北西端近くの傾斜地にある。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土壙墓 9 基からなっており、中には赤色顔料の塗布や礫床の構築といった厚葬のものも見られる。

古墳時代については、古墳以外の遺構は確認されていない。まず前・中期に属する古墳としては、上ヶ原古墳群 E 支群（福谷 1976）・山田古墳群（福谷 1976）・虹山古墳（中田 1989）等が従来から知られていた。上ヶ原古墳群 E 支群は後述する可部古墳群に含まれる一支群で、箱形石棺を埋葬施設とする古墳 5 基と竪穴式石室をもつ古墳 1 基からなっている。山田古墳群は根谷川東岸から少し入った所の小丘陵突端にあり、箱式石棺を埋葬施設とする古墳群である。虹山古墳は発掘調査が行われており、また築造時期や内容的に可部寺山 1 号遺跡との関係が注目されるため、以下やや詳細に触れてみたい。本古墳は可部平野部の西縁にあたる標高約 129 m の丘陵頂部に立地しており、可部寺山 1 号遺跡とは約 2.5 km 離れて東西に向かい合う位置関係にある。墳形は帆立貝式古墳あるいは造り出し付円墳で、全長 24.6 m、後円部径 20.8 m の規模である。後円部の頂部中央に大小 2 基の埋葬施設を持つ。中心的な 1 号主体は、上面の長辺 7.0 m、短辺 3.2 m の方形土壙に、長さ 4.7 m、直径約 1 m と広島県内でも最大級の割竹形木棺が納められていたと推定されている。棺内からは鉄剣・鉄鏃・刀子・ガラス製小玉が、また棺外から鉄斧や土師器が出土したが、土壙や木棺の規模からするとこれらの副葬品の内容は貧弱とされる。一方 2 号主体は、1 号主体の南西側に隣接して設けられており、上面の長辺 3.0 m、短辺 1.4 m の方形土壙の中央にさらにもう一段の掘り込みを持つ二重土壙である。副葬品は出土していない。本古墳の築造時期は 5 世紀代の前半から中葉にかけての頃と考えられ、また規模の大きさや眺望の優れた立地等からして、当時眼下の平野部全域を支配したような有力首長が葬られた墳墓であると推定されている。

寺山丘陵一帯には、台古墳（福谷 1976）・寺山古墳（福谷 1976）・可部寺山第 5 号古墳（島軒・鎌田 2004）・可部寺山第 6 号古墳（渡邊・葉杖 2004）というように当該時期の古墳がまとまって築かれている。台古墳は丘陵北裾にあった箱形石棺を持つ古墳であり、また寺山古墳は丘陵西側斜面に位置していて人骨が出土したといわれるが、ともに消滅しており詳細は不明である。可部寺山第 5・6 号古墳については近年発掘調査が行われ、また可部寺山 1 号遺跡に近接していることから深い



第1図 可部寺山1号遺跡周辺遺跡分布図 (S = 1 : 25,000)

1. 可部寺山1号遺跡 2. 可部寺山第5号古墳 3. 可部寺山2号遺跡 4. 寺山城跡・可部寺山第6号古墳 5. 台古墳 6. 高松城跡 7. 土居屋敷跡 8. 菩提所観音寺跡 9. 丸子山遺跡
 10. 九品寺北古墳群 11. 九品寺南古墳群 12. 水落古墳 13. 城ヶ平古墳 14. 番谷遺跡 15. 上ヶ原古墳群 16. 原迫古墳群 17. 青古墳群 18. 給人原古墳群 19. 虹山古墳

つながりが想定される。第5号古墳は丘陵北東半側の南西向き緩斜面に立地しており、尾根筋を周溝で区画してわずかに地山整形することで南北12.5m、東西10.5mの長円形の墳丘を造り出している。埋葬施設としては墳丘上に2基と東側墳丘外に1基の土壙が確認されており、このうち墳丘中央の1基が中心主体と考えられる。これは上面の長辺3.25m、短辺2.25mの隅丸長方形の土壙に木棺を伴ったもので、一部に赤色顔料が見られた。残る2基は長辺が2m内外の小型の隅丸長方形土壙で、墳丘上の1基は主たる被葬者に密接な関係のある人物、また墳丘外の1基は彼らに従属した者の埋葬施設と想定されている。また中心主体からは短冊形鉄斧が、周溝からは土師器甕が出土しており、これらの特徴等からして、本古墳の築造時期は古墳時代中期の前半頃と考えられている。一方第6号古墳は、第5号古墳から北東方向の丘陵北東端近くに位置している。古墳域を区画するための溝と埋葬施設1基が確認されたが、地形改変が著しいため古墳全体の規模や墳形等は明らかでない。埋葬施設には割竹形木棺が使用されていたようであるが、それを納めた土壙の形態は不明である。埋葬施設から鉄斧と鉄鎌が、また溝からは土師器甕が出土しており、これらの特徴から本古墳は古墳時代中期の5世紀中頃から後半に築造されたと考えられている。

古墳時代の後期になると、福王寺山の東麓から南麓にかけての一带に小規模な古墳が集中して築かれた。これらは一般に群集墳と呼ばれ、この時期に全国各地にみられた形態である。当地区の群集墳は可部古墳群（福谷1976）と総称され、九品寺北・九品寺南・城ヶ平・上ヶ原・原迫・青及び給人原の各古墳群から構成されている。横穴式石室を埋葬施設に持つ円墳が主体で、その総数は80基を越えていたと見られる。出土品の特徴等から、本古墳群の築造時期は6世紀後半から7世紀中頃と考えられている。

古代の律令制のもとでは、可部平野部には条里制が敷かれており、近年までその碁盤目状の土地区画が名残をとどめていた。また根谷川を少し遡った三入地区にも、同様の条里地割があったことが古文書より知られるという。10世紀に成立した『和名類聚抄』には、安芸国安芸郡内11郷の中に「漢弁(かべ)」「弥理(みり)」の郷名が見え、それぞれが現在の可部・三入地区一带に比定されている。そして平安時代末期には、これらの郷を中心として可部荘及び三入荘の2荘園が成立し、以後中世を通じて存続した。三入荘には、承久の乱(1221年)の功績によってこの地の地頭職を得た熊谷氏が関東から下向し、当地は戦国期まで長くその支配の中心地であった。一方の可部荘の在地領主に関しては、数氏の名が古記録に散見されるのみで明確ではないが、一貫した支配体制は見られなかったようである。そして14世紀後半以降、荘園内の諸領地が熊谷氏に与えられ、やがて可部全域も実質的に熊谷氏の勢力下に入ることとなった。熊谷氏は安芸国内の国人領主層の盟主であった武田氏の配下にあったが、16世紀前半には台頭してきた毛利氏に従うようになり、以後17世紀初頭に毛利氏が長門国萩に移封されるまでその有力家臣として可部一带に勢力を保ち続けた。近世には、本地区は太田川の河川交通や先述したような陸上交通の結接点として発展し、今日の広島市北郊の中心地としての基盤を培っていった。

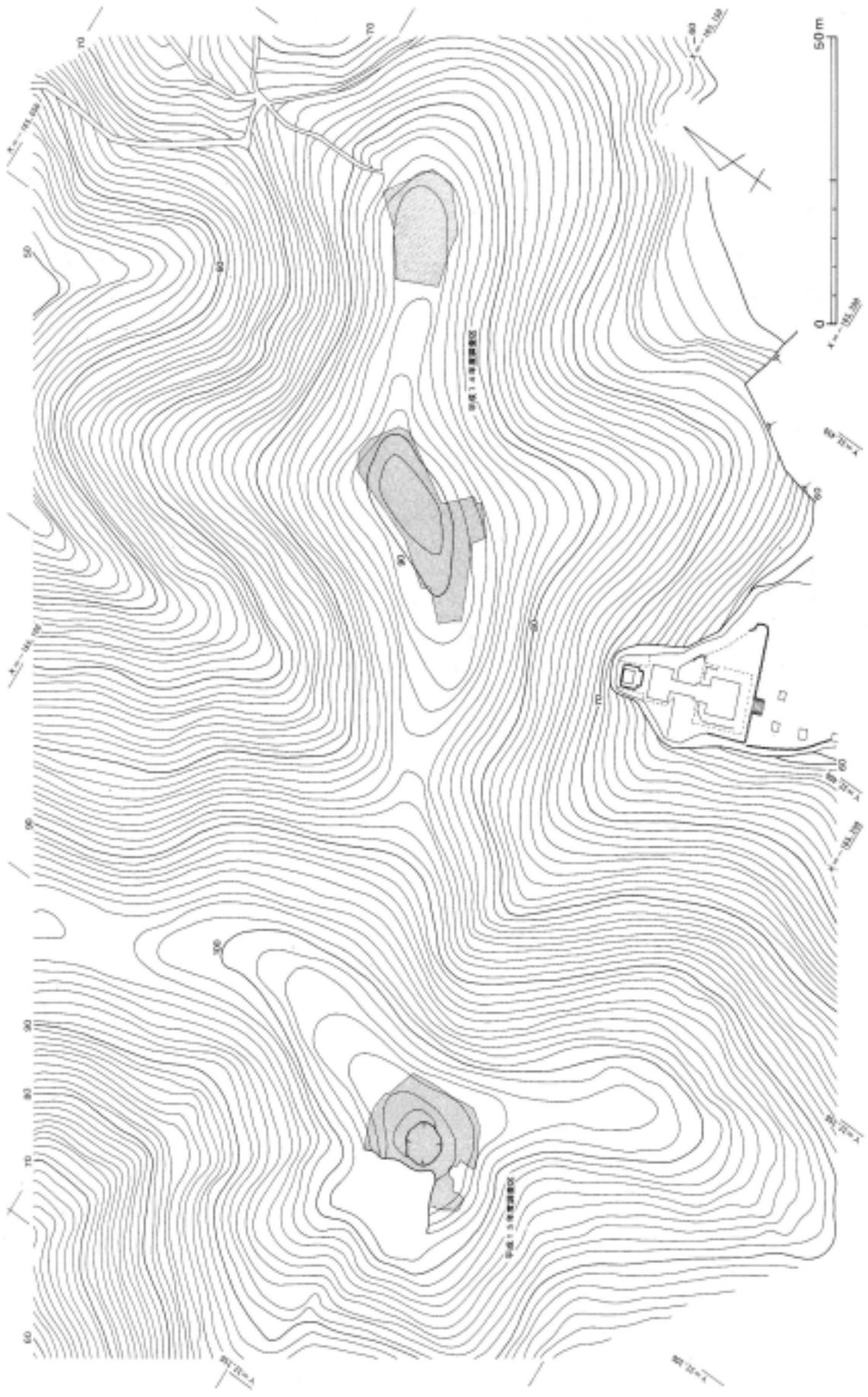
本地区に見られる古代以降の遺跡は、大半が中世の山城に関連したもので、それ以外では番谷遺跡の中世の配石遺構(宮田1997)が知られているに過ぎない。主な山城跡としては伊勢ヶ坪城跡(藤井・田村・松岡1976)・観音寺山城跡(藤井・田村・松岡1976)・新城山城跡(藤井・田村・松岡1976)

・船山城跡（藤井・田村・松岡 1976）・高松山城跡（藤井・田村・松岡 1976）・寺山城跡（渡邊・葉杖 2004）等があり、いずれも平野部を望む丘陵や山地上に立地している。また山城関連では、熊谷氏関係の菩提所観音寺跡（藤井・田村・松岡 1976）・土居屋敷跡（藤井・田村・松岡 1976）が根谷川沿いに残る。

以上見てきたように本地区には多くの遺跡が残されており、中でも古墳時代後期の一大群集墳や中世の熊谷氏に関わる一連の遺跡群は、広く太田川流域の歴史を紐解く上でも従来注目されてきたものである。そうした状況の中、今回発掘調査を行った可部寺山 1 号遺跡では、古墳と中世の宗教関連施設等が確認されたが、古墳に関しては可部古墳群に先立って寺山丘陵一帯に集中築造された中期古墳群として、また中世遺構に関しては山城跡関連以外の性格を持った遺構の調査事例として、それぞれの位置づけが注目される場所である。

参考文献

- 赤木祥彦 1976 「可部町の自然」『可部町史』広島市役所
石田彰紀 1991 「中山の歴史のあけぼの」『中山村史』広島市
島軒満・鎌田博子 2004 『可部寺山第 5 号古墳・可部寺山 2 号遺跡発掘調査報告書』広島県教育委員会・株式会社アコード
中田昭編 1989 『虹山古墳発掘調査報告』虹山古墳発掘調査団
福谷昭二 1976 「歴史のあけぼの」『可部町史』広島市役所
宮田浩二編 1997 『番谷遺跡発掘調査報告』財団法人広島市歴史科学教育事業団
渡邊昭人・葉杖哲也編 2004 『寺山城跡』財団法人広島県教育事業団
藤井昭・田村裕・松岡久人 1976 「古代・中世の可部」『可部町史』広島市役所



第2図 可部寺山1号遺跡周辺地形図 (S=1:1,000)

Ⅲ 遺 構 と 遺 物

1. 調査概要

可部寺山1号遺跡は、根谷川東岸側にある独立丘陵（通称寺山）の最高所（標高106m）から東方向に派生する丘陵尾根上にかけて位置する。平成13年度に本発掘調査に先行して実施された確認調査によって、第1号古墳と東側に派生する丘陵尾根上に第2号古墳のほか、土坑が1基確認された。このことを受けて、平成14年度に東方向に派生する丘陵尾根上を対象として、平成15年度は第1号古墳を対象として、それぞれ発掘調査を実施した。

平成14年度調査区では、土坑と推定された遺構は古墳の埋葬施設であることがわかり、これを第3号古墳とした。また、その8m東に植林用に掘削された溝によって破壊された埋葬施設1基を確認し、これを第4号古墳とした。そのほか、この第3号古墳と第4号古墳との間に、時期不明の土坑（SK2）1基を確認した。また、平成15年度は第1号古墳を調査対象としたが、墳丘と想定された高まりは後世の地形改変によって大きく削平を受け、しかも古墳に伴う遺構や遺物が認められなかったため、古墳の存在については未確定という結論を出さざるをえなかった。ただし、現段階ではその存在を否定も肯定もできないことから欠番として報告する。なお、その高まりの北側に中世に属すると考えられる焼成施設跡1箇所と、時期不明の土坑（SK1）1基と窯跡状遺構1基が確認された。

遺物としては、第2号古墳埋葬施設から鉄剣1点・刀子1点・ガラス製小玉10点が、第3号古墳の埋葬施設内から刀子2点・鉄鎌1点が出土した。また同古墳墳丘覆土中から須恵器破片2点が出土している。なお、第3号古墳周溝付近から鉄斧1点が出土しているが、後述するように本古墳に伴う可能性がある。焼成施設跡からは土師質土器・瓦質土器の破片数点、鉄釘約100点（凶化できたものは80点）、銅銭45点以上（うち9枚分と5枚分溶着したものを含む）が出土しているほか、その周辺で瓦質土器破片が数点、目貫1点などが出土している。

本報告ではこれらの遺構をあわせて可部寺山1号遺跡としてまとめ、古墳群、中世の遺構、そしてその他の遺構の報告を行うものである。

2. 遺構と遺物

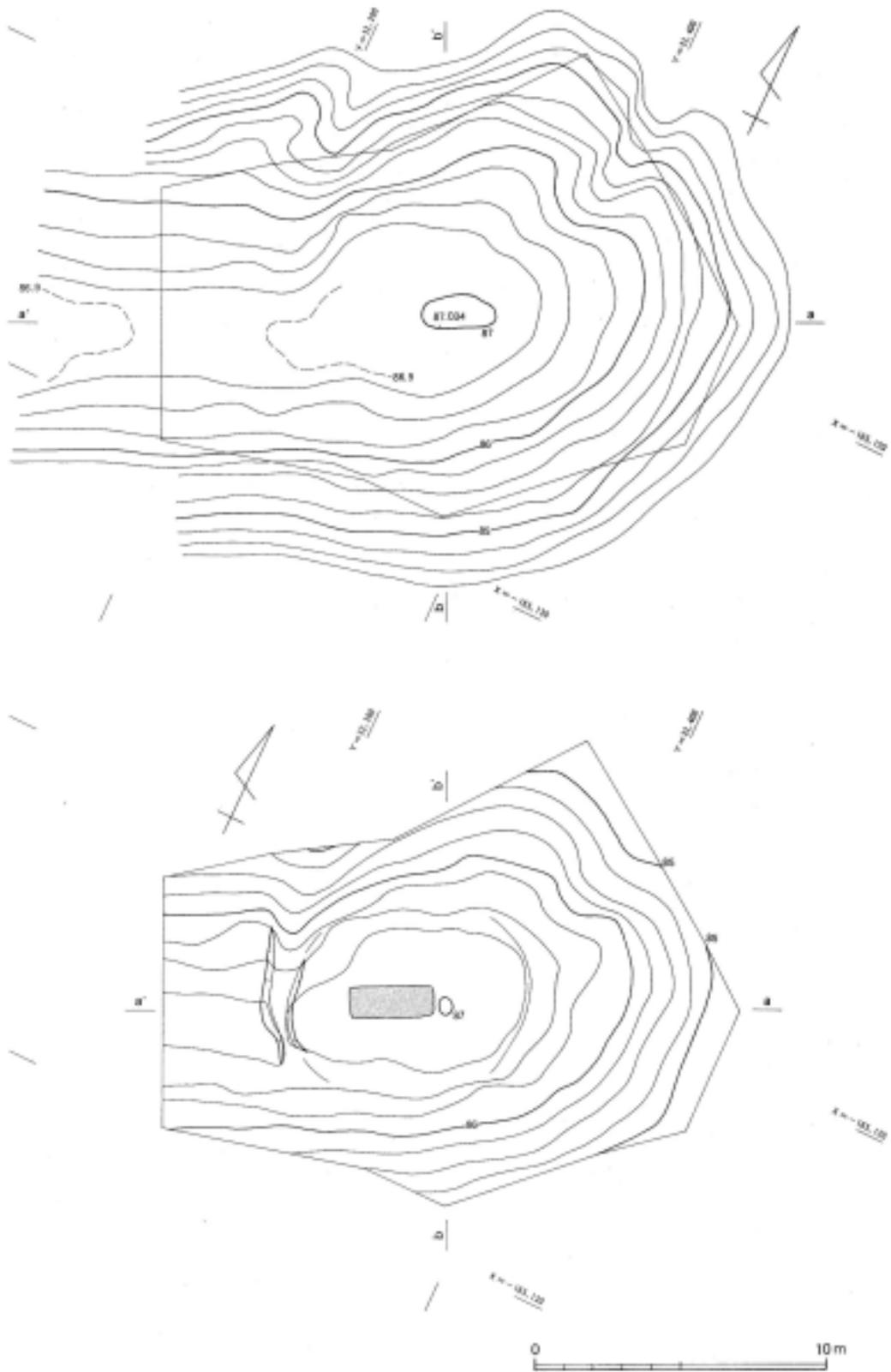
A. 古墳時代

①第2号古墳（第3～5図・図版5～7）

独立丘陵最高所から約300m北東方向の位置にある。本古墳は削平を受けており、地形観察のみでは明確な墳丘は認められなかったが、発掘調査に先立って実施した地形測量によれば、尾根を寸断した溝の痕跡を確認でき、標高86.250m付近に傾斜変換点と、わずかながら削り出して成形された平坦面も認められた。これによれば、南北約7m・東西9.7mのやや南北に長い楕円形状を呈する円墳で、高さは現状で約1.5mと考えられた。

a. 墳丘

発掘調査は、地形測量の結果に基づき、尾根軸線を基線とし、墳丘中央で直行方向にそれぞれ土層



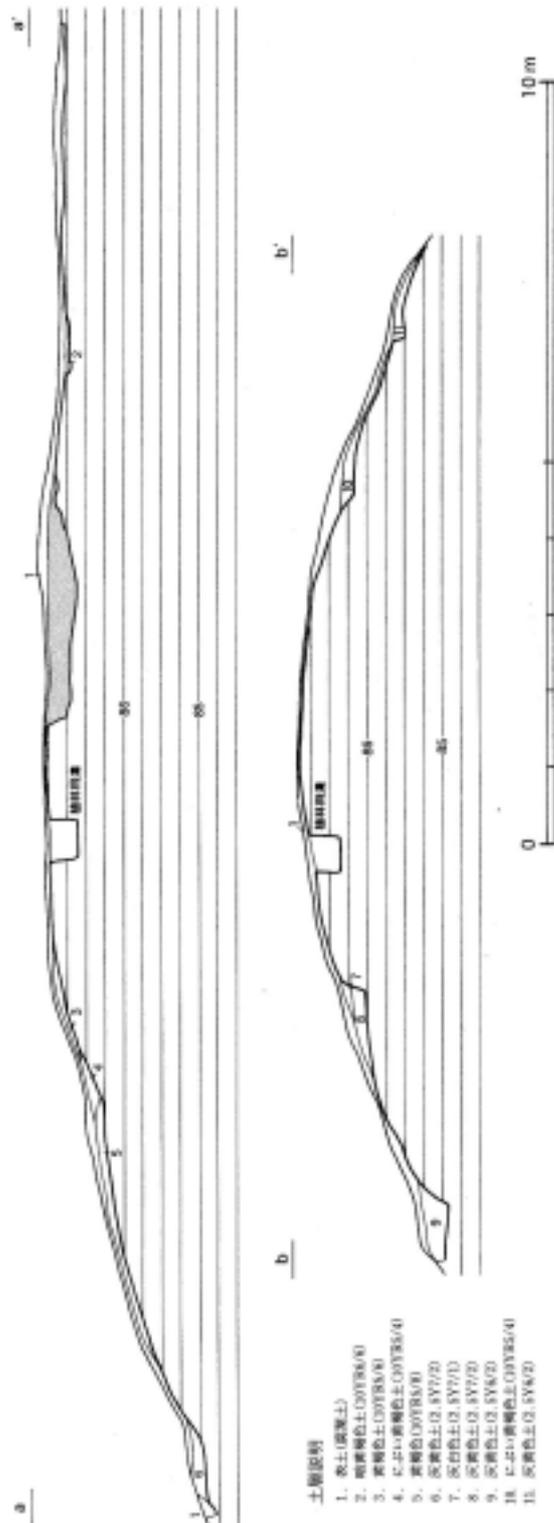
第3図 可部寺山第2号古墳地形測量図（上；調査前・下；調査後）（S = 1 : 200）

観察用の畦を残して墳丘覆土の掘り下げを行った。その結果、前述したような傾斜変換点及び平坦面については、その大半が後世の植林用に造成された平坦面であったことが確認できた。また、墳丘やその周辺においても、植林用の溝が認められ、後世の地形改変が著しいことが確認された。そのため墳丘形状は明確にできなかった。地形測量で確認されたように尾根を遮断する溝が西側にあることから、南北方向は不明であるが、東西方向で8 mの楕円形状を呈する古墳だとすることができる。高さは現状で1 mである。溝は現状で長さ約5 m・幅約1 m・深さ約0.1 mの規模である。墳丘上面の中央よりもやや南寄りの位置に、尾根軸線に対して平行に掘り込まれた埋葬施設1基を確認した。

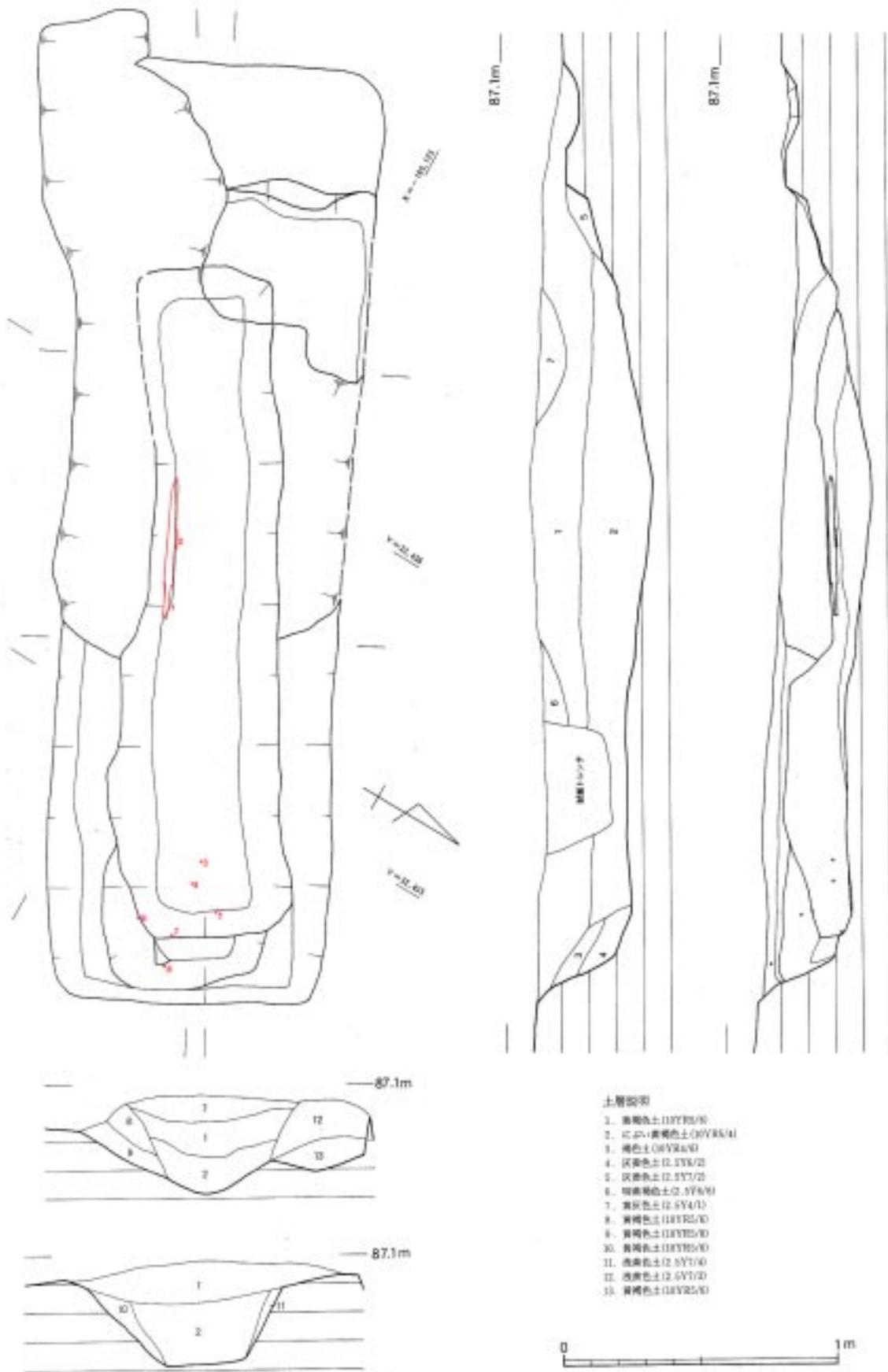
b. 埋葬施設

埋葬施設は、墳丘中央よりもやや南寄りの位置に、尾根軸線に対してほぼ平行に掘り込まれていた。先述のとおり墳丘上面は削平を受けていた。構造は二重土壙で、上面の規模は現状で長さ3.3 m・幅は1 mである。ほぼ中央に二次壙が掘り込まれており、規模は上端で2.55 m・幅0.6 m・深さ0.25 mで、床面は長さ2.15 m・幅0.3 mである。床面の断面形状は僅かにU字形を呈していた。土層断面観察などで木棺の痕跡は認められなかったが、このことから長さ約2 m・幅約0.6 mの舟底状の木棺が埋置されていたと考えられる。埋葬頭位は出土遺物の位置や床面の高低差を考慮すれば、東側と考えられ墓壙の主軸方向はN 63° Eである。

墓床面のほぼ中央南壁に沿って鉄剣が切っ先を西側に向けて出土し、またそのほぼ中央の刃部の直下に切っ先を西側に向けた刀子1点が出土している。また東小口側にガラス小玉が、試掘調査で出土した2点を含めて10点が出土している。このうち6点が原位置を保っている。この小玉の出土位置やレベルはランダムで規則性がなく、被葬者に装着されていたとするよりも葬送儀礼にあたって撒かれたか、木棺蓋上面に置かれていたものが木蓋腐食とともに散らばった可能性がある。な



第4図 可部守山第2号古墳土層断面図 (S=1:100)



第5図 可部寺山第2号古墳埋葬施設実測図 (S= 1:20)

お、墳丘上からは土器片1点が出土しているが、細片のため器種等は明らかではない。

c. 出土遺物

鉄剣（第16図1）全長51.5cm，剣身長38cm・幅3.6～2.2cm，茎部長13.5cmである。剣身の断面はレンズ状を呈する。剣身や茎の両面には木質が遺存しており，木製の柄が取り付けられ，木製の鞘に収められていた可能性がある。茎部には関から7cmと11cmの位置にそれぞれ直径6mmと，4mmの目釘穴が穿孔されている。重量は271.3gである。

刀子（第16図2）全長6.8cm，刃渡り4.5cm，茎部長1.3cm・幅0.6～0.9cmである。木質等は認められなかった。重量は4.9gである。

ガラス小玉（第16図3～12）大きさは直径0.3～0.5cmの範囲に収まるものである。色は概ねコバルトブルーを呈しているが，微妙に濃いものや，緑がかったものもありヴァリエーションがある。形状的には明らかにカットしているもの（4・5）もあり，3・8・10・11のような扁平なものとは製作技法上の違いがあると考えられる。

② 第3号古墳（第6，7図・図版8，9-a）

独立丘陵の最高所から約85m北東方向に位置する。第2号古墳とは南西方向に約50m離れている。先述したとおり当初土坑と認識されていたものであったが，この落ち込みについては掘り力が長方形を描くことが判明し，その中からは刀子や鎌が出土した。また，掘り下げ段階でこの落ち込みの東側約3mの位置で南北方向に尾根を遮断するように掘り込まれた溝が確認された。この結果，この落ち込みについては本来この位置に存在した古墳の埋葬施設であり，確認された溝についてもそれに伴うものであることが明らかとなった。

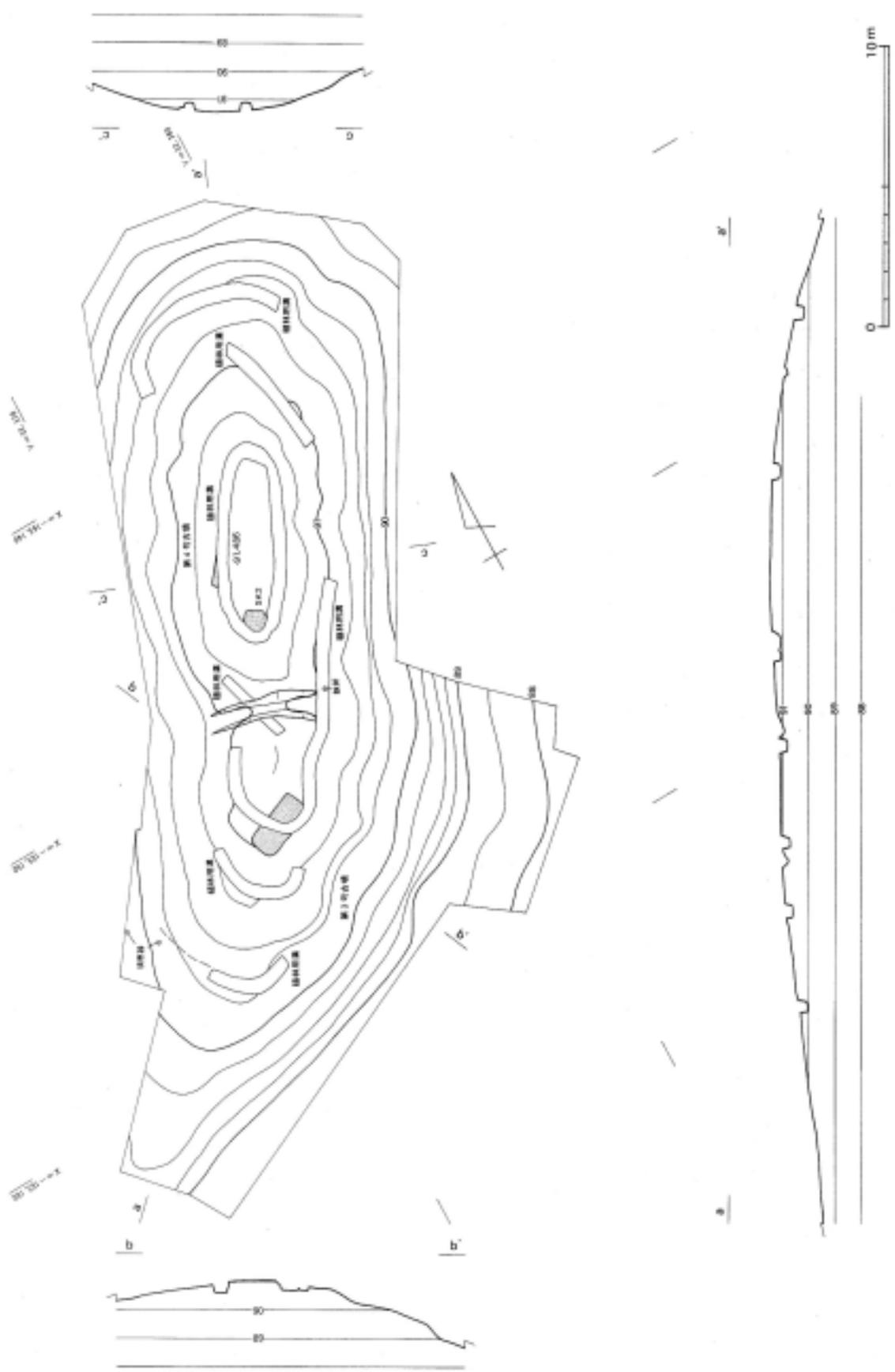
a. 墳丘

先述したとおり，調査前には古墳の存在を想定していなかったが，調査の結果，この箇所にも古墳が存在することが判明したものである。確認された埋葬施設の3m北に長さ約4m・幅0.8～1m・深さ0.3mの規模の溝を確認した。この溝はプランが南側，すなわち埋葬施設を中心に弧を描いており，墳形は円形と考えられた。しかしながら墳丘上やその周辺は植林用に掘り込まれた溝が何箇所も認められたほか，丘陵尾根上は後世の削平が認められたことから，全体的に墳丘形状を復元することは困難であり，特に東西斜面側は改変が著しく傾斜変換点は認められなかった。僅かながら南西側に傾斜変換点らしき箇所（破線）を認めるのみであった。この箇所と溝の南側下端を南西側と北東側の墳端とすれば，直径約9mの円墳とすることができる。高さは現状で約0.5mである。

墳丘覆土中ではあるが，墳丘西裾部付近で須恵器破片2点が出土している。

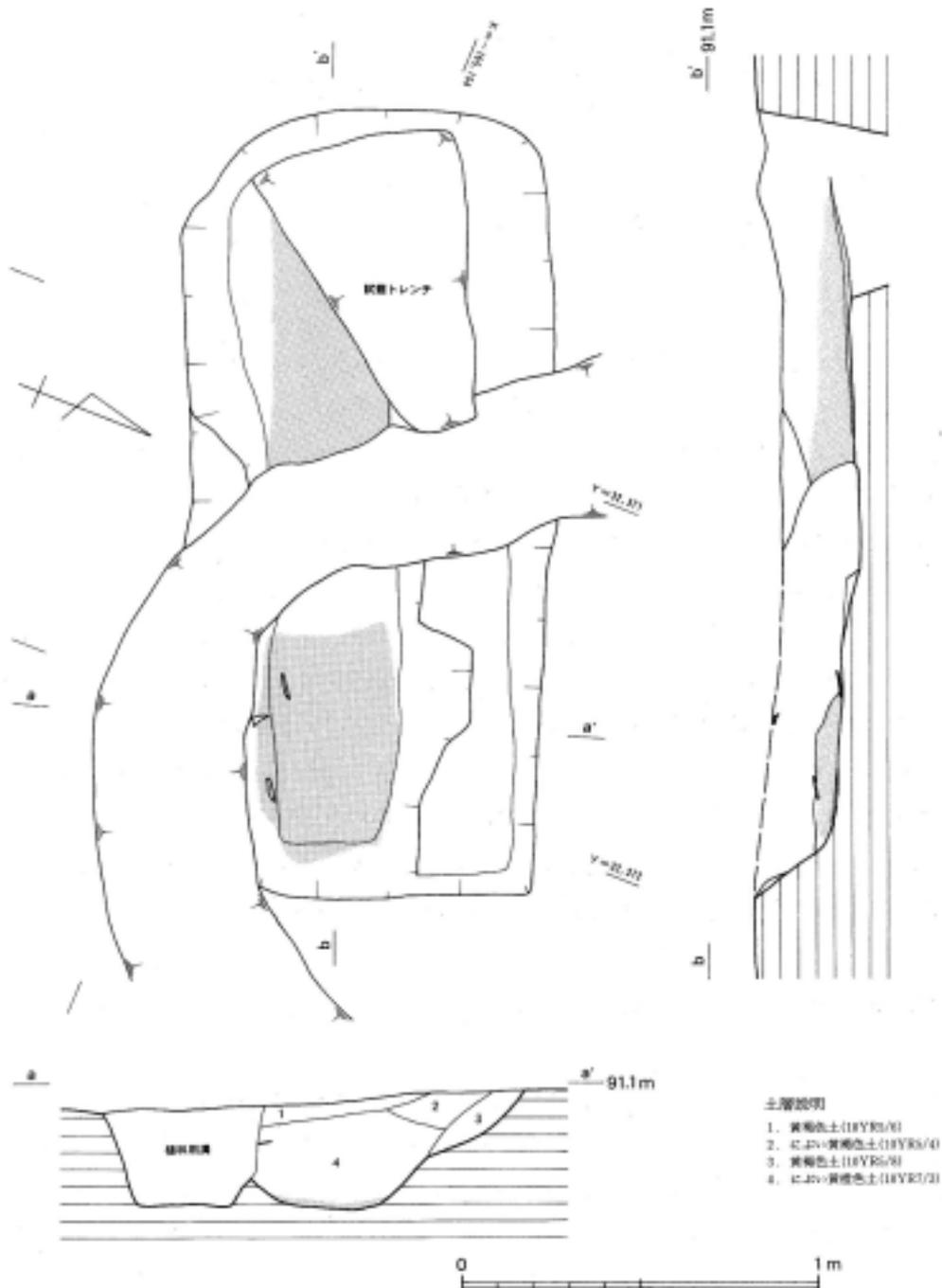
b. 埋葬施設

埋葬施設は，後世植林用に掘り込まれた溝によって，その中央と南側面の東側が壊されていたが，遺存状況は良好であった。埋葬施設の規模は現状で長さ2.3m・幅1m・深さ0.3mである。一部確



第6図 可部寺山第3号古墳・第4号古墳地形測量図 (S=1:200)

認調査のトレンチで破壊を受けていたが、遺存する箇所状況によれば、北側面の一部は二重土壙構造を呈していた。床面の断面は舟底状を呈していた。そのことから木棺の痕跡は認められなかったが、恐らくは舟形状の木棺が埋置されていたものと考えられる。木棺の規模は、東側が削り込まれているため、正確な数値については不明であるが、概ね190cm前後・幅40～45cmと考えられる。副葬品として、南東側面の床面直上から刀子2点と、やや上方から鎌の破片1点が出土している。この鎌はその出土位置から植林用の溝掘削時に破損したものと推測される。



第7図 可部寺山第3号古墳埋葬施設実測図 (S = 1 : 20)

この埋葬施設の主軸方向はN69° Tである。埋葬頭位は、床面が西側小口側（標高90.7 m）よりも東側小口側（標高90.75 m）が5 cm程度高くなることから、東側と考えられた。このことからすれば、副葬品は被葬者の頭部左側に置かれていたことになろう。

なお、植林用の溝箇所以外の床面全域には赤色顔料と考えられる赤色化した範囲が認められた。この箇所の土壌について科学分析（X線回析）を実施したところ、成分の検出までにはいたらなかった。

なお、本古墳に伴う溝東端のやや北側の位置、植林用の溝の埋土中から、鉄斧1点が出土している。その出土位置や、その錆化状態が埋葬施設内から出土した鉄鎌と類似していることなどの理由から、本古墳の埋葬施設内に埋置されていた可能性がある。後述するように他の出土遺物との時期的な矛盾はない。

c. 出土遺物

須恵器（第16図16, 17）破片が2点出土したのみである。その特徴から同一個体の可能性がある。16は外面タタキののち丁寧に磨り消している。17は外面に自然粕がかかる。内面は両者とも丁寧に磨り消されている。ともに灰黄色を呈し、胎土は精緻、焼成は良好である。

刀子（第16図13, 14）西側のものが13, 東側のものが14である。13は全長7.8cm, 刃渡り5.2cm, 茎部長さ2.6cmである。茎部には木質が、刃部には繊維質がそれぞれ遺存する。茎には木製の柄が装着され、刃部には繊維状のものが巻かれていたと考えられる。重量は5.9 gである。14は切っ先先端が欠損する。全長7.2cm, 刃渡り4.5cm, 茎部2.8cmである。茎部には木質が遺存し木製の柄が装着されていたのであろう。重量は6.3 gである。

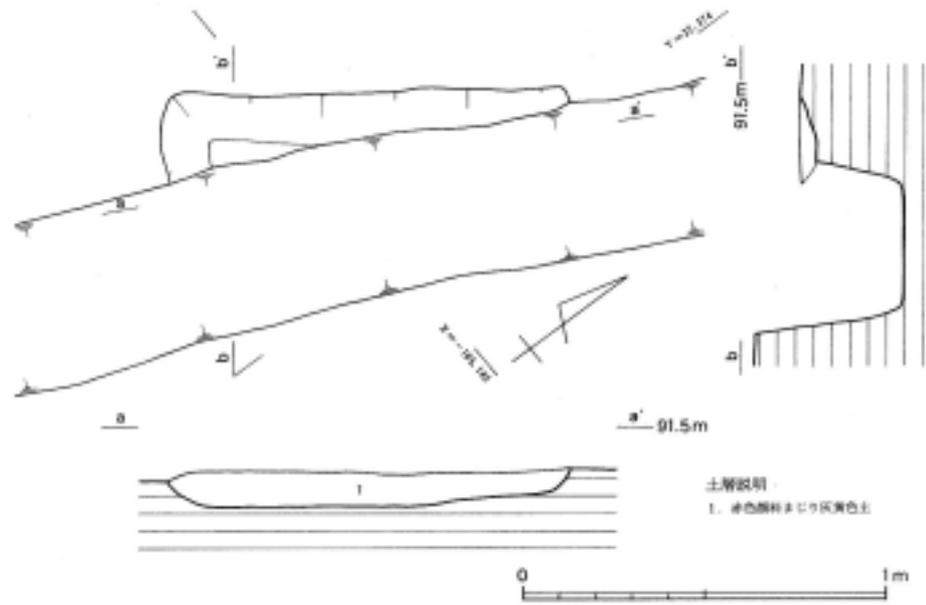
鎌（第16図15）切っ先のみが出土した。その出土状況からすると、埋葬施設中央を分断する植林用の溝掘削時に破損した可能性がある。曲刃形式と考えられる。重量は14.7 gである。

鉄斧（第16図18）埋葬施設に伴っていないが、埋葬施設を分断する植林用の溝内から出土し、鎌と同様の錆化状態を呈していることなどから、本古墳埋葬施設に伴うと考えているため、まとめて記述する。いわゆる有肩鉄斧で、柄の内部に木質が遺存している。長さ13.1cm, 刃部長さ8.3cm・幅8.4～9cm。柄内部は長さ約5.5cm, 幅4.3cm。重量は644.4 gである。

③ 第4号古墳（第6, 8図・図版9-b, 10）

本古墳についても、調査前はその存在が不明であったものである。しかも、第3号古墳東側の平坦面上に確認された長楕円形に全周する植林用の溝を掘り下げ中に確認したものである。この植林用の溝の壁面に、長さ約110cm・深さ10cmの範囲で赤色顔料を塗布したため赤色変化したと考えられる埋土箇所が認められた。植林用の溝の東側面には埋葬施設の痕跡は認められなかったので、長さ・幅ともこの植林用の溝の範囲内で収まるものと考えられ、その結果この埋葬施設は小人用と考えられる。この埋葬施設は尾根中心部よりも北西方向にずれた位置に築造されていることから、この尾根中央部には別の埋葬施設（恐らく成人用のものであろう）が存在した可能性がある。確認さ

れた埋葬施設の数値が示すように、恐らくは削平されたものと考えられる。この遺存した埋葬施設周辺の地形改変は丘陵斜面にまで及んでいるためか、墳丘と認められるような痕跡、すなわち傾斜変換点や溝などは認めることができなかつた。そのため墳丘形状や規模について不明であるが、この遺存した埋葬施設をもって第4号古墳と呼称することとする。



第8図 可部寺山第4号古墳埋葬施設実測図 (S = 1 : 20)

a. 埋葬施設

植林用の溝掘削のため、ほとんど破壊され、僅かしか遺存していない。遺存した範囲は長さ110cm・幅25cm・深さ10cmである。先述したとおり、植林用溝の東側壁面にまでは埋葬施設の痕跡が認められなかつたことから、最大規模で長さ110cm・幅50cmである。このことからこの埋葬施設は小人用であったと考えて大過なからう。

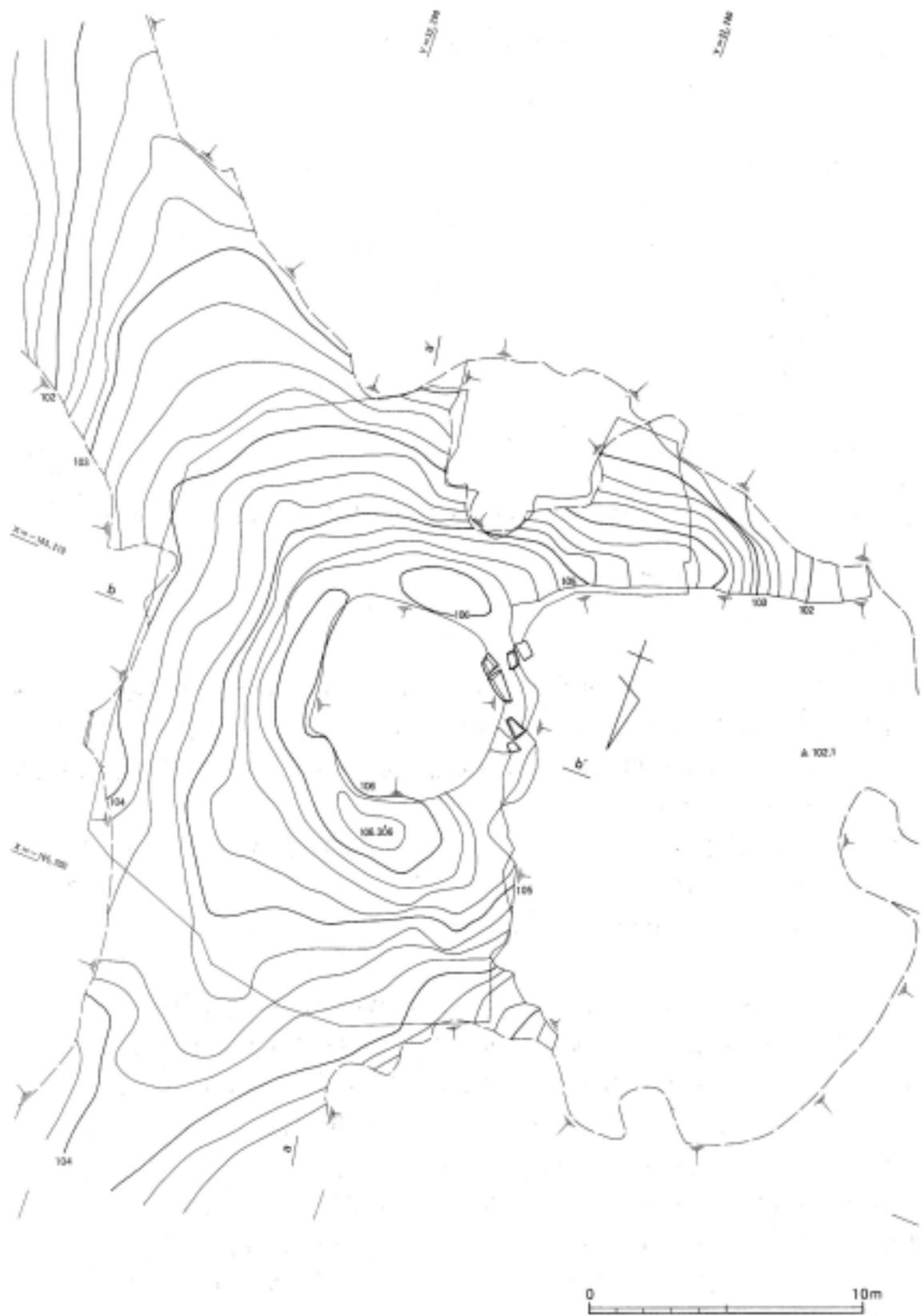
埋土は赤色顔料の影響からか、赤色化していた。ただし、この土壌を科学分析(X線回析)したところ、成分の検出までにはいたらなかつた。

本埋葬施設内からの出土遺物は認められなかつた。

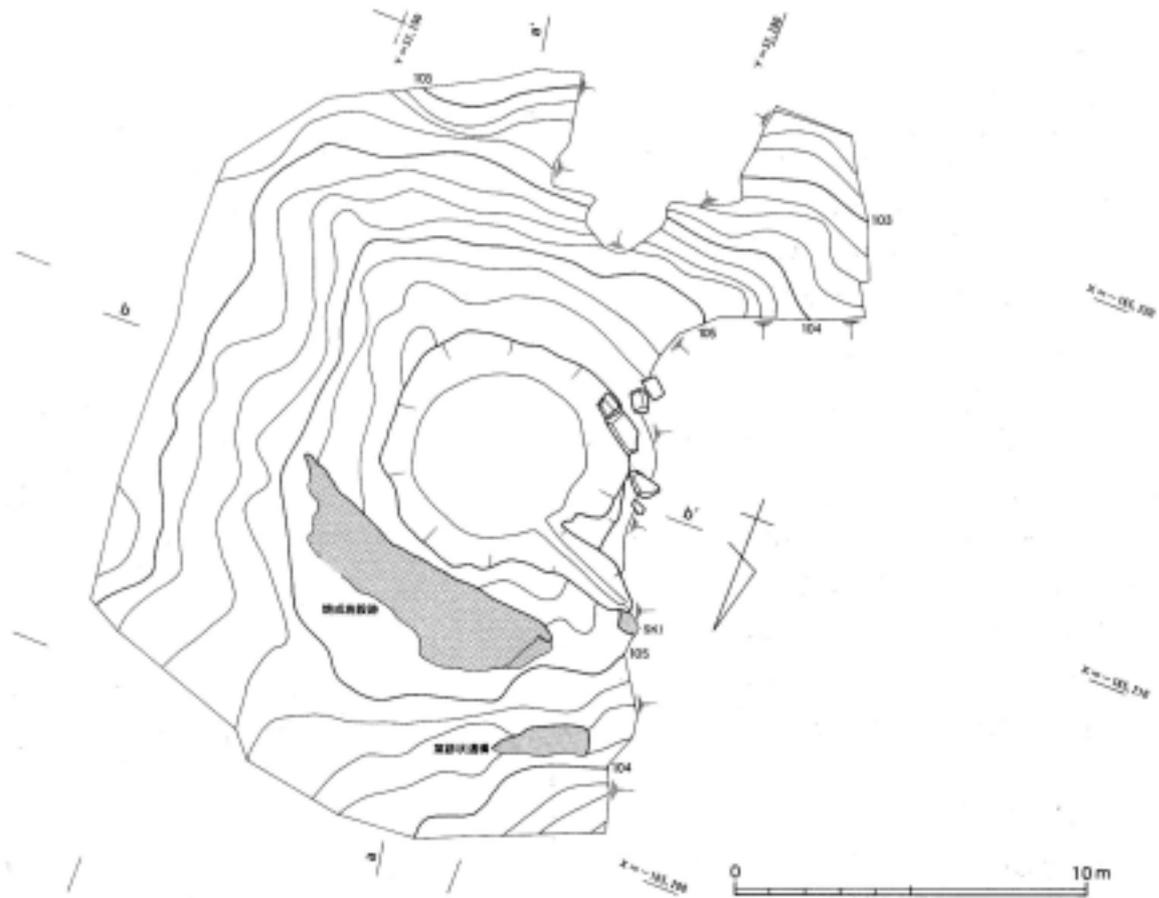
最後に、第1号古墳と考えられた高まりについて、少し触れておこう(第9～12図・図版2)。

第1号古墳と考えられた高まりは独立丘陵の最高所(標高106m)に位置しているが、ここは南端付近にあたり、可部の市街地を望む西方向や太田川河口を望む南方向への視界は良好である。先述したとおり、調査にあたっては古墳を想定して実施した。調査開始以前から高まりの中央部はクレーター状に大きく窪み、西側も削平を受けている状態で、遺存状況は良好ではなかつた。

調査開始前に実施した地形測量によれば、西側は大きく削平されているものの、南側や東側では標高104.500mないし104.750m付近で傾斜変換点が認められ、特に南側はほぼ直線的にラインが描かれ、南東隅や南西隅はそれぞれ北方向に直角に曲がっている。北東側や北側、特に北東隅はやや歪に膨れておりきれいな直線となっていないが、ほぼ104.750mのラインを中心に傾斜変換が認められ、かつ先述した南側のラインとほぼ平行する。このことから一辺約15m、高さは現状で約1.8mの



第9図 可部寺山1号遺跡平成15年度調査区地形測量図(調査前)(S=1:200)

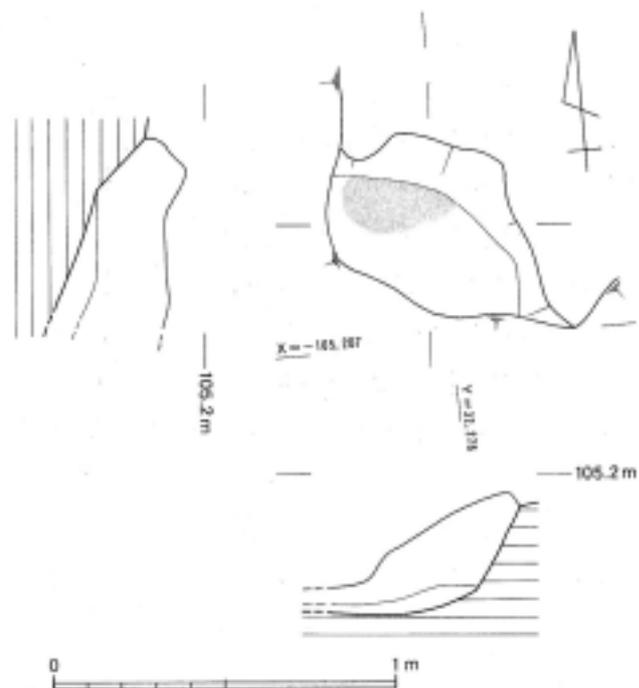


第10図 可部寺山1号遺跡平成15年度調査区地形測量図（調査後）（S = 1 : 200）

方形墳を想定できた。しかしながら、調査の結果をみると、焼成施設跡などの中世以降の遺構が確認されたことや後世の地形改変が著しいこと、そして古墳に伴うと考えられる遺構や遺物が認められなかったことから、この高まりについては古墳と確定するには至らなかった。ただし、後述するようにこの高まりの西側で確認した土坑（SK1）の存在や、この高まりの立地環境からすれば、古墳の存在を完全にも否定できないことから、本報告では欠番とした次第である。

④ SK1（第11図・図版14-a）

この土坑は焼成施設跡の南西約2mに位置し、第1号古墳とみなされた高まり



第11図 可部寺山1号遺跡SK1実測図（S = 1 : 20）

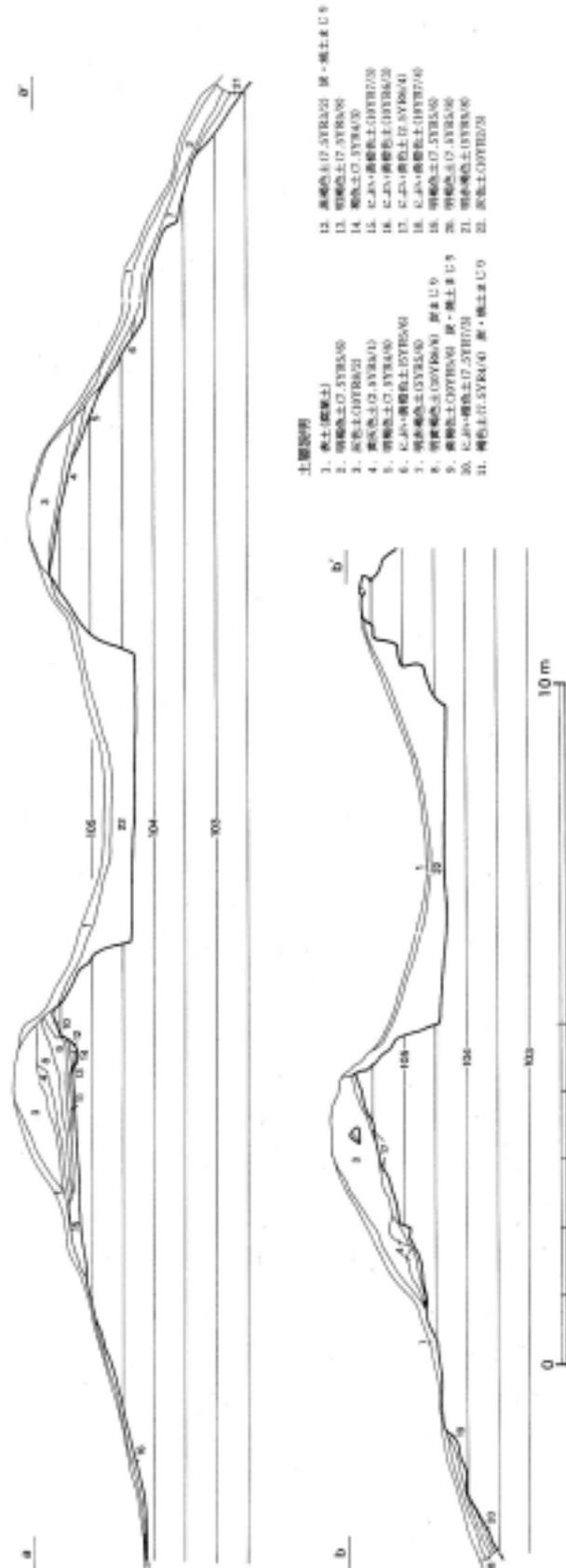
の西側が削平された際に破壊されたと考えられる。SK1の現状は、その北東隅部の掘り方上面で南北方向50cm・東西方向80cmの範囲が遺存するのみであった。その約30cm下に確認された床面は南北方向30cm・東西方向50cmであったが、その一部には赤色顔料が認められた。このことからSK1は墓壇と考えられる。本遺構内からの出土遺物はなく、所属する時期は不明であるけれども、位置関係からすれば古墳に伴う埋葬施設のひとつであった可能性がある。本遺構は確認状況から見て南北方向に長軸をとる墓壇であったと推定される。

B. 中世

① 焼成施設跡

a. 遺構

本遺構は、平成15年度調査区の高まり中央にあるクレーター状の窪みの北側に接して位置している。墳丘の北向きの緩斜面を一部削り取り、東西約9m、南北約1.5～2.5mの範囲で平坦面を造り出している。遺構面は東西方向にはほぼ水平であるが、南北方向は北側が僅かに低くなっている。平坦面の中央付近での標高は約105.3mである。平坦面の東・北及び西側はなだらかに墳丘面と連続しているが、南側の周縁部には、底面での幅が15cm内外の溝が設けられている。この溝の北壁の高さは約10cmであるが、南壁はそれよりも大きく立ち上がっており、場所によっては底面から上縁までが50cm以上となっ



第12図 可部寺山1号遺跡平成15年度調査区土層断面図 (S=1:100)

ている。また溝を平面的に見てみると、東端から約3.5 m西へ寄った地点を境に緩く折れ曲がった「く」の字状の形態をしており、特にその屈曲点から西側の約5.5 m分は極めて整然とした直線形状を示している。さらにこの屈曲点から北方向へも、平坦面を横切って深さ約5cm、幅50cm程度の浅い溝が延びている。

本遺構上には、炭化した木片や火を受けて赤変し硬化した粘土塊が入り混じって散乱していた。またそれらに混じって、鉄釘・銅銭等の金属製品や土器片が多数出土した。遺物の多くはばらばらに散らばったような状態であったが、銅銭の一部には数枚が重なり合ったものもあった。これは、元々束ねてあったものの一部が残ったものと思われる。鉄釘は100点以上、銅銭は45点以上が確認されたが、15m²程度の狭い範囲にわずかな種類の遺物がまとまって遺存していることは、これらが特別な行為に伴ってこの場所にもたらされたものであることを示している。

さらに、特に平坦面の西側半分の区域を中心に、これらの遺物や炭化物等の上に人頭大の礫が載っている箇所が多数あった。礫には川原石・山石の両方が見られ、しかも火を受けたことによって割れたり下面が赤変しているものもいくつか認められた。こうした礫の検出位置や赤変の事実からは、木質と考えられる何らかの物体を焼成する際に、同時に礫が火中に投げられていたことが推定される。

以上のような点から、本遺構は火を用いた何らかの儀式的な行為が行われた跡と考えられる。そしてその過程において、銅銭が通貨としてではなく別の特別な意味を付与されて用いられたことが想像されるのである。

b. 出土遺物

瓦質土器・土師質土器（第17図19～22，第1表）本遺構及びその周辺から多数の瓦質土器及び土師質土器片が出土したが、いずれも細片で器種や器形まで明確にできるものはごくわずかである。個々の土器の特徴等については観察表にまとめた。

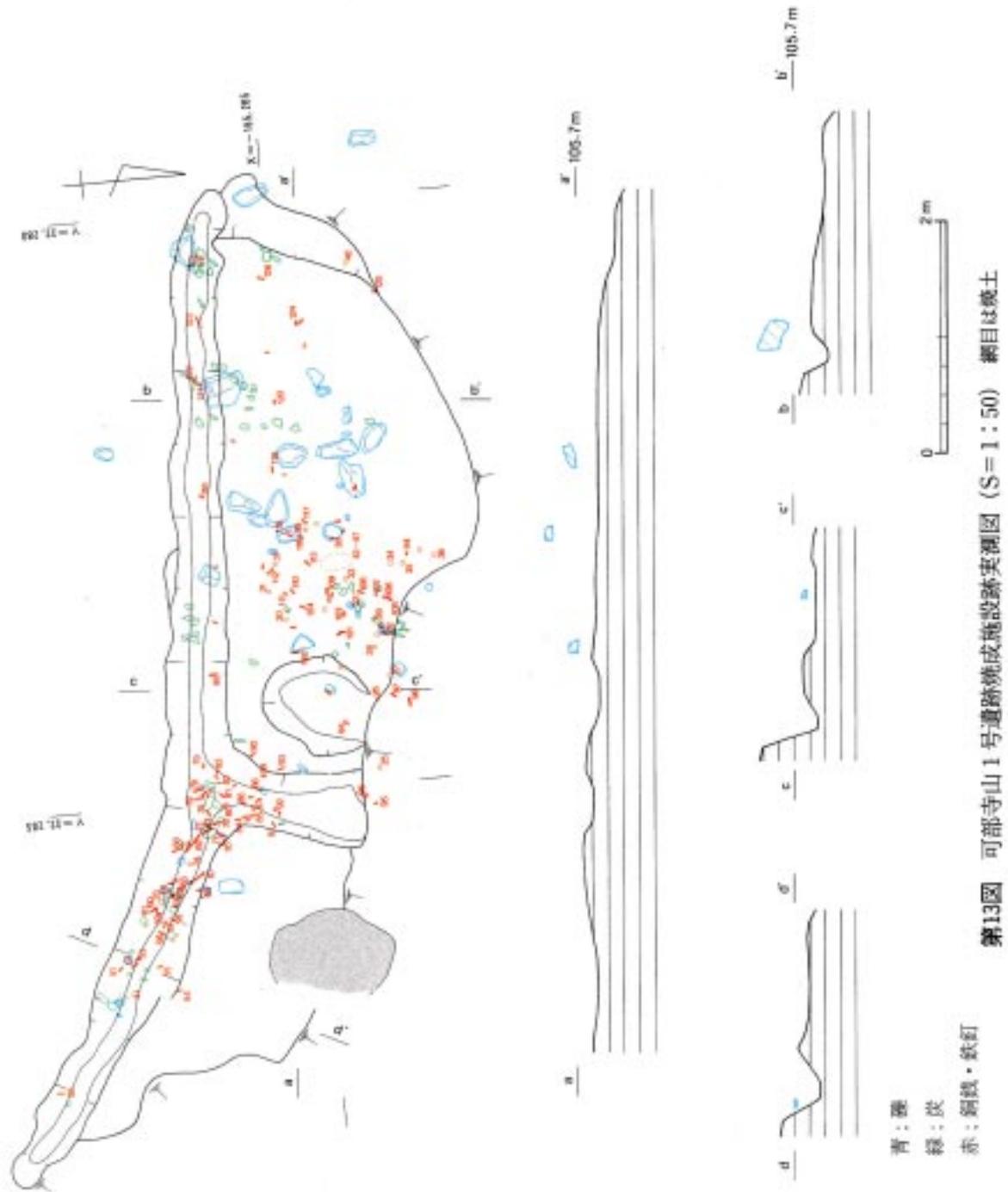
銅銭（第17図23～47，第2表）総数で45点以上が出土したが、それらの大半が欠けたり破片となっている。銭名を鋳出したものと、それが全くないいわゆる「無文銭」とが混在している。銭種が明らかにできるものは全て唐・宋・明といった時代の中国の銅銭であるが、鋳上がり状態の悪さ等からして日本国内で模造された「私鋳銭」と考えられる。また出土したいずれの銅銭も、表面が溶けたり錆が進んでかなりもろくなっているが、こうした状況は相当強い火を受けた結果と思われる。25は5枚、41は9枚の銅銭が重なったまま錆によって固着した状態で見つかった。これらは、元来束ねられたものの一部が残ったものであろう。47は本来ならば銭名の文字は中央の四角い郭穴の各辺とそろっているはずであるが、文字と郭穴との並びが45度ずれて、郭穴の角先に文字が配されてしまっている。これは、模造用の鋳型を製作する際に郭穴の向きがずれてしまった不良鋳型を、そのまま使用して鋳造した不良「私鋳銭」と考えられる。

銅製金具（第17図48）円筒形状の銅製品で、高さ0.5cm、胴体径0.7cm、裾径0.8cmである。一枚の銅板を打ち出して成形されており、わずかに広がっている裾部分には所々切れ込みが入っている。円柱状の突起に被せられていたものと考えられる。

目貫（第17図49）目貫は、刀剣の柄の表裏に据えた飾り金具である。本目貫は銅製で、一部欠損し

ているようであり、遺存部分は縦1.2cm, 横3.2cmである。厚さは0.2cm内外である。全体に緩く湾曲しており、その外側面に彫られている図柄は蓑亀とも見えるが判然としない。

鉄釘 (第17図50~127, 第3表) 総数で100点以上が出土した。身部はいずれも断面が長方形を成しており、また頭部は叩いて平らにした部分を折り曲げて形作られている。大半がほぼまっすぐであるが、72・107・119・124等のように強く屈曲したのものもある。



第13図 可部寺山1号遺跡焼成施設跡実測図 (S=1:50)

第1表 瓦質・土師質土器観察表

no.	器種	出土位置	寸法	器形	調整・成形	備考	
19	瓦質土器	—	—	口径部は「ハ」の字状に開く。	外面は屈曲部分はナデ仕上げでそれ以下は叩き仕上げによる沈線が横や斜め方向に付く。内面はナデ仕上げ。灰黄色(2.5Y7/2)を呈し、胎土は精緻である。焼成は良好である。	—	
20	—	—	—	—	外面は叩き仕上げで、沈線が斜め方向に付く。内面はナデ仕上げである。灰黄色(2.5Y7/2)を呈し、胎土は精緻である。焼成はややあまい。	二次焼成を受け、外面の荒れが著しい。	
21	土師質土器	皿	焼成施設	復元口径12.4cm	体部はわずかに内湾しながら立ち上がり、口縁付近はほぼ直線状となる。口縁端部は丸くおさめる。	内外面ともロクロを用いたナデ仕上げ。灰黄色(2.5Y6/2)を呈し、胎土は精緻である。焼成は良好である。	—
22	—	椀	焼成施設	復元口径 9.8cm	体部は直線的に立ち上がり、口縁付近ではわずかに外湾する。口縁端部は丸くおさめる。	内外面ともナデ仕上げ。にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈し、胎土は精緻であるが1mm大の砂粒(長石・雲母)を含む。焼成は良好である。	—

第2表 銅銭観察表

no.	銭種	初鑄年代	読み方・書体	備考	no.	銭種	初鑄年代	読み方・書体	備考
23	無文銭				36		宋(1017)	順・行書	模鑄
24	洪武通寶	明(1368)	対・楷書	模鑄	37	無文銭			
25	洪武通寶?	明(1368)	対・楷書?	模鑄 5枚溶着 二次焼成 溶変	38				
26	無文銭				39	無文銭			
27	無文銭				40	無文銭			
28	咸口口寶	宋(998 or 1065)		二次焼成	41	無文銭			9枚溶着 二次焼成 溶変
29	無文銭				42	口宋通寶	宋(1039 or 1101)	対・楷書	模鑄
30	無文銭			二次焼成 溶変	43	乾元重寶	唐(758)	隸書	模鑄
31	無文銭				44	皇口通寶	宋(1039)	対	模鑄 溶変
32	無文銭				45	口口通寶		篆書	模鑄 溶変
33	元祐通寶	宋(1086)	順・行書	模鑄	46	元口口口		行書	模鑄 溶変
34	祥符口寶	宋(1008)	楷書	模鑄	47	紹口口寶			模鑄 45度ブレ
35	永樂通寶	明(1408)	対・楷書		A	口口口寶		楷書	溶変

第3表 鉄釘観察表

(単位 ; mm, g)

no.	長さ	幅	厚さ	重さ	no.	長さ	幅	厚さ	重さ	no.	長さ	幅	厚さ	重さ	no.	長さ	幅	厚さ	重さ
50	26	2.5	2.5	0.8	69	230	6	5	45.1	89	24	4.5	3.5	1.4	110	26	2	2	0.5
51	42	3	3	1.3	70	45	2.5	1.5	1.5	90	37	2.5	2	2.4	111	21	3.5	3.5	0.7
52	37	2.5	2.5	1.1	71	37	2.5	2.5	1.6	91	37	2.5	2.5	1.5	112	70	4	4	5.2
53	33	3	3	0.9	72	123	4	4	13.3	92	32	2	2	1.9	113	37	4	3.5	2.8
54	25	4	3	0.9	73	31	2	2	0.9	93	38	2.5	2.5	1.3	114	23	2	3	0.9
55	30	2.5	2.5	0.8	74	32	2.5	2.5	1.3	94	25	3	3	0.7	115	56	3	4	4.1
55	110	4	3	5.3	75	33	2.5	2.5	1.1	95	20	5	2.5	1.0	116	43	2.5	3.5	1.3
56	38	2.5	2.5	0.9	76	82	4	4	6.9	96	34	3	2	1.2	117	39	3	3	1.4
57	28	3.5	3	0.7	77	35	3	2.5	2.0	97	39	3	3	1.5	118	25	3	3	0.7
58	26	3	2.5	1.0	78	83	4	4	12.0	98	46	3.5	4	3.7	119	50	3.5	3.5	2.1
59	35	2.5	2.5	1.2	79	22	2.5	2.5	0.8	99	39	2	2	3.7	120	30	2	2	1.3
60	66	5	5	5.1	80	47	4.5	4.5	4.3	100	40	3.5	2.5	1.6	121	36	2	3	1.2
61	37	2.5	2.5	1.2	81	32	2	3	1.0	101	31	2	2	0.9	122	25	3	3	0.9
62	28	2	2	0.7	82	30	2.5	2.5	0.9	102	107	6.5	5	21.2	123	74	5	4	9.7
63	24	3.5	2.5	0.8	83	27	3	2.5	0.7	103	30	2.5	2.5	2.1	124	95	4.5	3	6.9
64	36	2	2	1.1	84	29	2.5	2.5	1.1	104	29	2	2	0.8	125	36	4	4	4.3
65	77	4	4	10.6	85	79	4	5	9.5	105	28	2.5	2.5	0.5	126	34	2	2	1.3
66	80	4	3	6.9	86	33	2	2	0.9	106	41	3	2.5	1.6	127	107	4	4	14.2
67	187	5.5	5	41.3	87	40	3	3	1.5	107	52	4	4	1.8					
68	122	6	5	22.3	88	32	2.5	2	0.7	108	33	4	4	2.1					

c. その他の遺構

そのほかの時期不明の遺構としては、第3号古墳の溝の北2mの位置で確認された土坑(SK2)1基と、焼成施設跡の北側で確認された窯跡状遺構1基がある。

① SK2 (第14図)

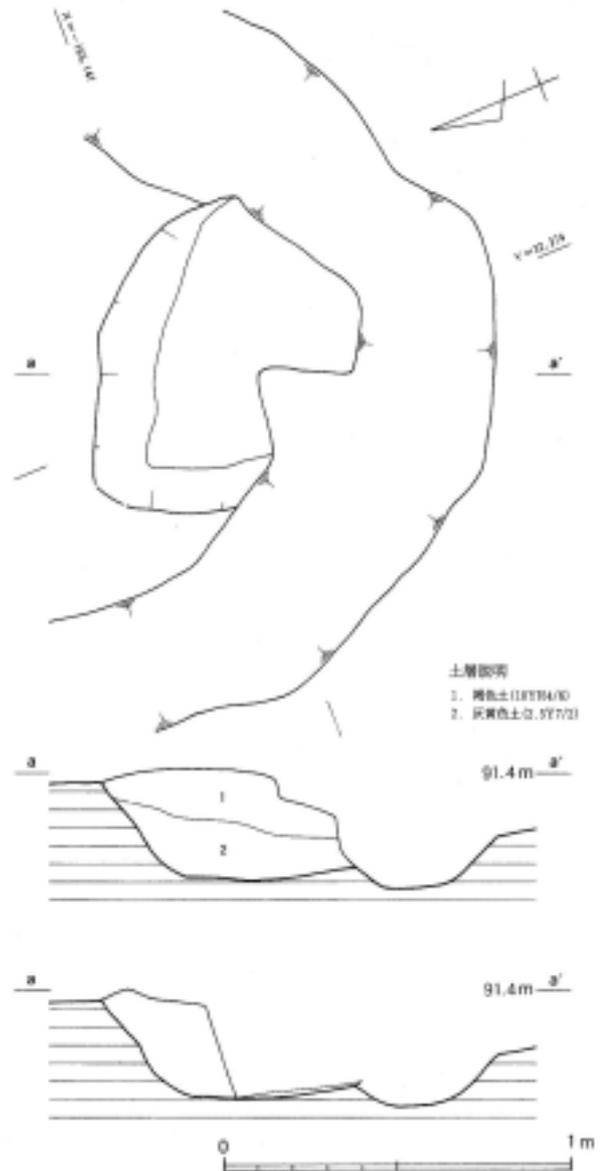
SK2は第4号古墳の埋葬施設を破壊している植林用の溝によって半壊状態の土坑である。そのため、形状・規模とも明らかにできていない。規模は、現状で東西方向90cm・南北70cm・深さは25cmである。本遺構内からの出土遺物はない。

② 窯跡状遺構 (第15図・図版7-b, 8)

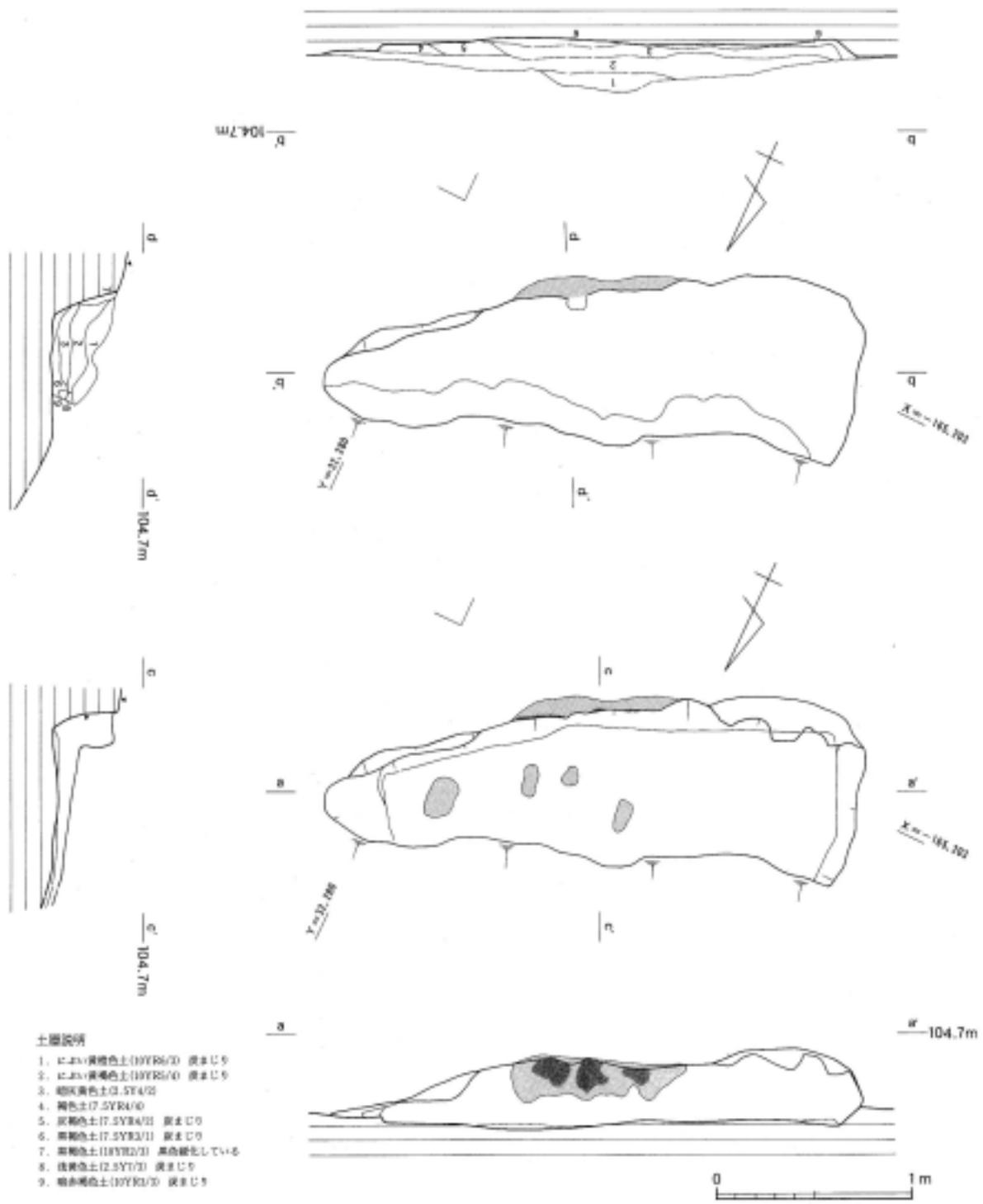
本遺構は、焼成施設跡の北東約1.8mに位置している。平成15年度調査区の高まりへと続く北向きの斜面上に設けられており、検出当初の遺構上面中央の標高は約104.5mである。遺構の北側はかなり削平されており、本来の形態はとどめていないものと考えられるが、現状では東西約2.7m、南北約0.8mの範囲が遺存している。現存部分の長軸は等高線に平行である。

検出時の遺構面精査や土層観察によって、本遺構は地中に何らかの目的で設けられていた空間が、上からの圧力によって天井部分が崩落し押しつぶされた状況であると考えられた。また、上面の一部には赤変もしくは黒変した土壌が見られ、なおかつ焼き締まって硬化した粘質土塊も散在している状況から、本遺構は強い熱を受けるような施設であったものと推定された。崩落した天井部分を取り除いたところ、遺構の南側には緩くカーブを描きながら立ち上がる壁が遺存しており、その高さは現状で30cm内外であった。この壁に続く床面はほぼ水平に造作されており、中央部分での幅は約60cmである。なお遺構の北側は先述したとおり削られて消滅したものと見られ、床面は地山となだらかに連続して下っており、南壁と対になると考えられるような壁面の立ち上がりは確認できなかった。遺存している壁面及び床面にも、所々に赤変もしくは黒変した部分が見受けられ、特に壁面の中央付近に顕著に残っていた。以上のような状況から、本遺構は何らかの焼成窯跡と考えられるが、確定はできなかった。

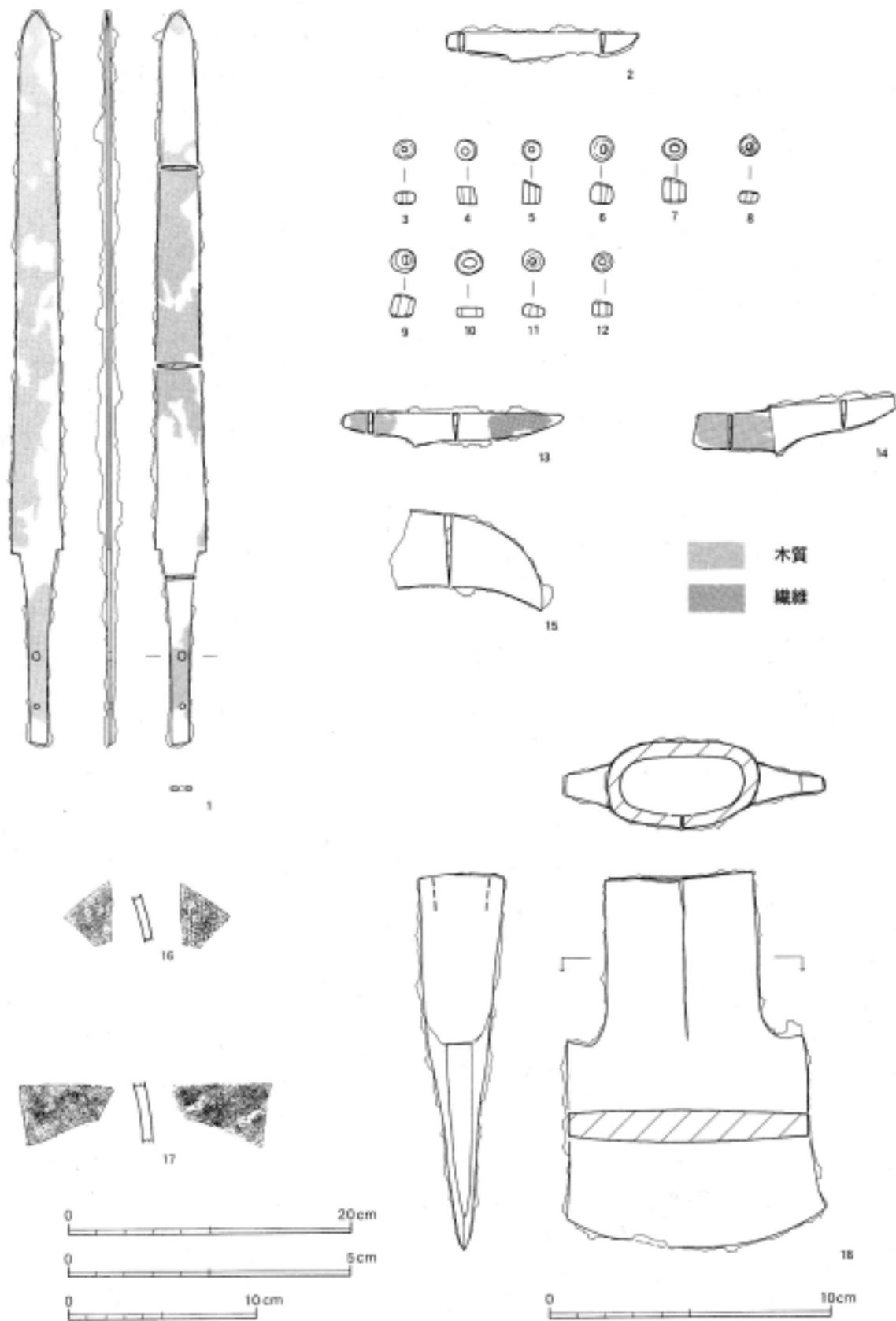
本遺構に伴う遺物は出土せず、本遺構の営まれた時期についても不明である。



第14図 可部寺山1号遺跡SK2実測図 (S = 1 : 20)

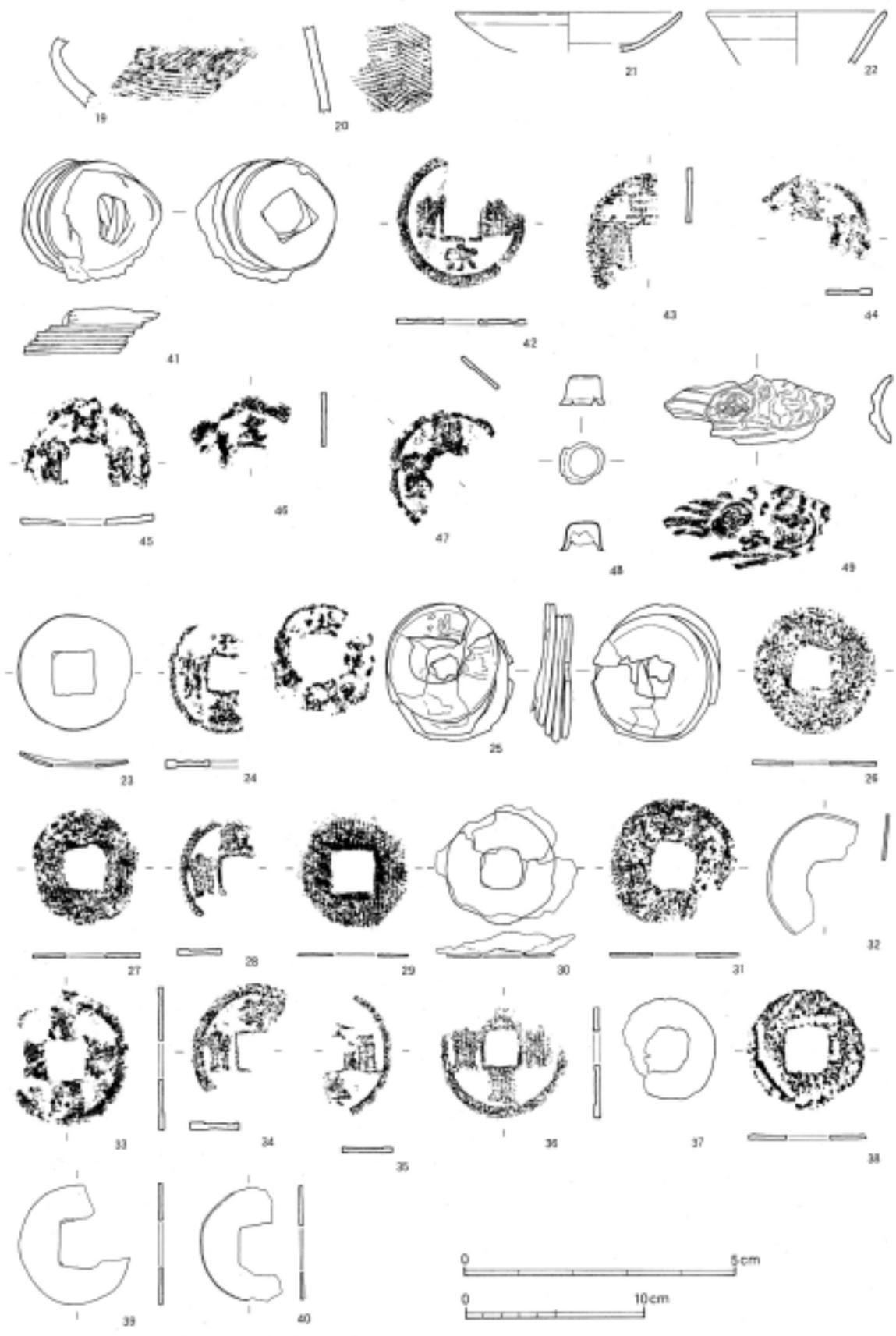


第15図 可部寺山1号遺跡窯跡状遺構実測図 (S= 1:30)

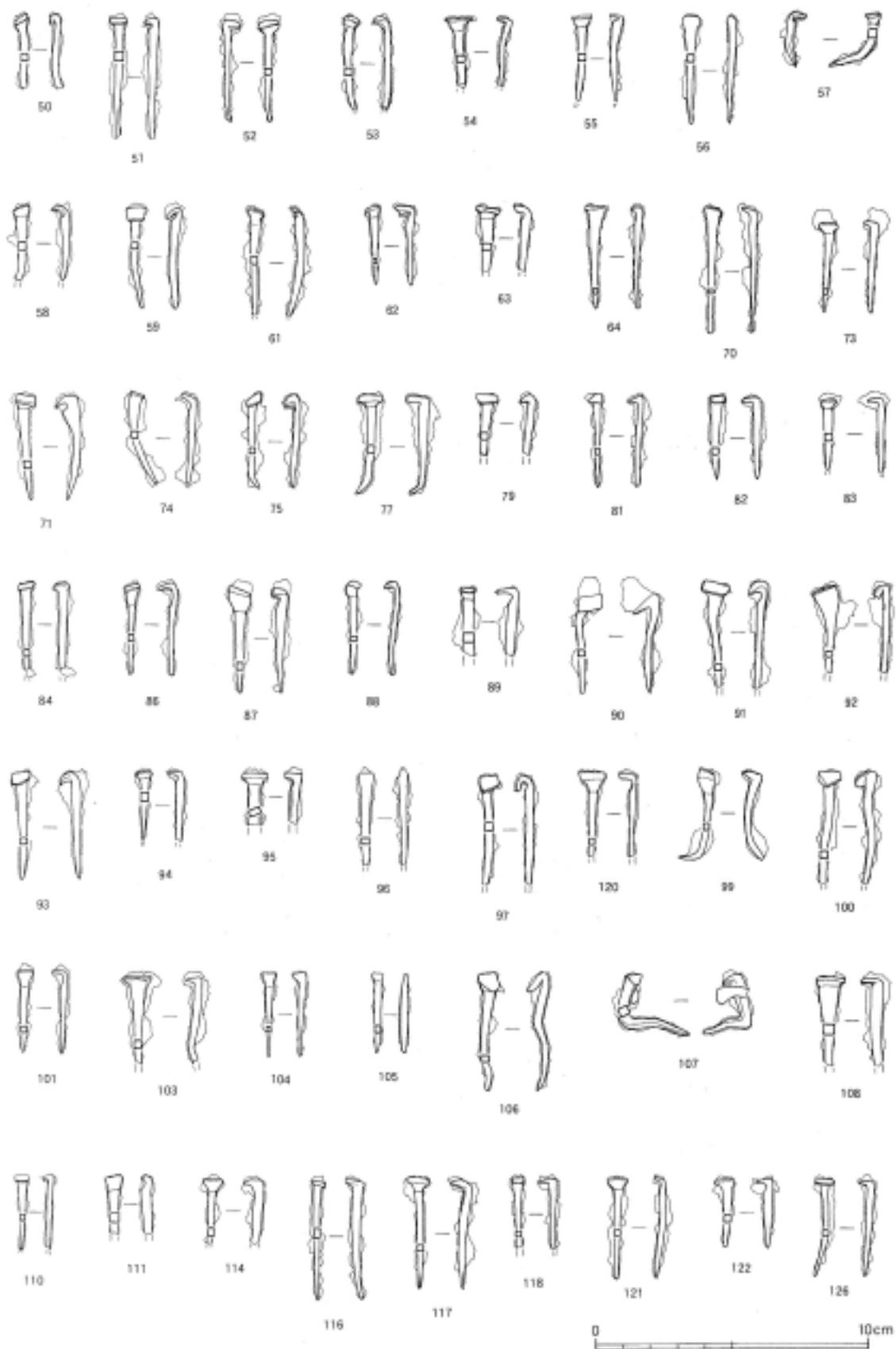


第16図 可部寺山1号遺跡出土遺物実測図(1)

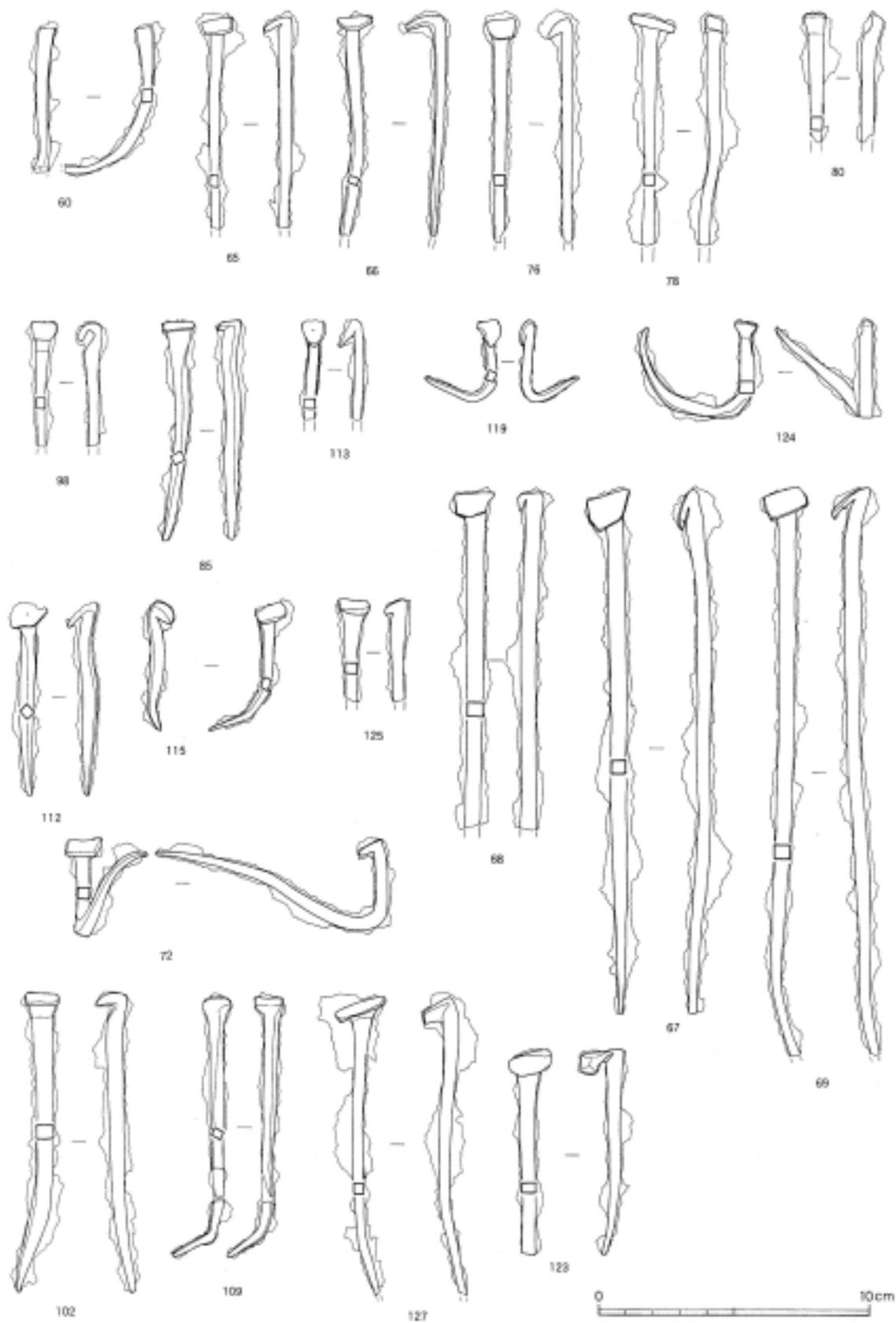
(1 ; S= 1 : 4, 2 · 13 ~ 15 · 18 ; S = 1 : 2, 3 ~ 12 ; S= 1 : 1, 16 · 17 ; S= 1 : 3)



第17图 可部寺山1号遺跡出土遺物実測図(2)(20~22;S=1:3, 23~49;S=1:1)



第18图 可部寺山1号遺跡出土遺物実測図(3)(S = 1 : 2)



第19図 可部寺山1号遺跡出土遺物実測図(4)(S = 1 : 2)

IV ま と め

平成14年度と平成15年度の発掘調査において、既周知の第2号古墳のほか、第3号古墳と第4号古墳の2基の古墳の存在が明らかとなった。なお、可部寺山1号遺跡が立地する独立丘陵上には、台古墳ほか、広島県立可部高等学校用地内において2基の古墳が調査されており、古墳群としては計5基の古墳からなることになった。そのほか、平成15年度調査区では中世の焼成施設跡などが確認されている。ここでは、古墳群を中心に明らかになったことを記述し、まとめとしたい。

1. 可部寺山古墳群について

第1号古墳については、後世の削平が著しく今回の調査では古墳の存在は明らかにすることができなかつたので、本稿では欠番扱いとすることにした。ただし、本古墳の立地を見ると、独立丘陵の最高所に位置し、眼下を流れる太田川や、根谷川が形成した沖積地への見晴らしがよく、古墳の立地としてはふさわしい位置にある。また、この度確認された土坑（SK1）が古墳に伴う可能性もある。これらめことからこの位置に古墳が存在していた可能性はあるといえよう。

第2号古墳は、直径約8mの楕円形状の墳丘を持つ古墳と考えられる。埋葬施設は長さ3.3m・幅1mの二重土壙で、その中に舟底状の木棺を埋置した埋葬施設と考えられる。副葬品には剣1点と刀子1点とガラス小玉10点がある。墳丘覆土から土器が出土しているものの細片のため時期は不明である。本古墳の築造時期について副葬品から推定してみよう。副葬品目のうち剣と刀子という組み合わせで類例を探すと、太田川下流域では安佐南区大町七九谷古墳がある。埋葬施設は二重土壙で割竹形木棺が納められたと推定されている。周溝から出土した土器から5世紀初頭頃の築造と考えられる(村田1999)。副葬品の出土状況や、出土した剣と刀子の形態も本古墳のものと類似しており時期的に近いことが想定される。ところで、可部町内で前半期の古墳として実態の判明しているのは、本古墳群から約2.5km西側に離れた丘陵上に所在する虹山古墳である。全長24.6mの帆立貝式古墳で、埋葬施設は二重土壙で割竹形木棺が埋置されたとされている。副葬品として剣1点、刀子1点、斧1点、鎌7点、ガラス小玉5点が出土しており、5世紀代の前半から中葉にかけての築造と考えられている。報告者である中田昭によれば、「当該地では最も規模が大きく、その立地も可部の平野を一望のもとに見渡せるような場所にあることから、この地域では最も古い時期の古墳」と推定され、帆立貝式の墳丘形態や、県内でも最大級の長さ4.7mを測る割竹形木棺などから、その被葬者像としては可部の平野全域を支配するような統一的な首長が想定されている(中田1989)。少量の玉類と鉄器といった副葬品目だけをみると、本古墳事例と類似しており、築造時期も近いものと推定される。以上のことから、第2号古墳については大町七九谷古墳や虹山古墳に近似した時期、すなわち5世紀前半段階と推定される。

第3号古墳は、直径9m規模の円墳と考えられる。埋葬施設は長さ2.3m・幅1mの規模の墓壙で、二重土壙の形態をとる。その中には舟底形状の木棺が埋置されたと考えられる。床面には赤色顔料の塗布が確認された。副葬品として鎌と刀子2点がある。鎌は曲刃タイプで5世紀前半以降のものである。なお、墳丘覆土中から須恵器破片2点が出土しているが、内面を丁寧磨り消しているこ

となどの特徴から5世紀でも中葉頃から後半段階と考えられる。これらの須恵器も本古墳に伴う可能性が高い。これらのことから、第3号古墳は5世紀中葉から後半に築造されたものと推定される。ところで、先述したように有肩鉄斧が本古墳周辺から出土している。広島市域において有肩鉄斧を出土する古墳は計7例になるが、概ね5世紀代に属するものである注1)。有肩鉄斧が出土する古墳の築造時期と本古墳の築造時期が重なっていることから、本古墳に伴う可能性は高いといえよう。

第4号古墳については、小児用と考えられる埋葬施設の一部が確認されただけで、後世の地形改変や削平によって墳丘の形態や規模は明らかにできなかった。この埋葬施設は床面がほとんど遺存していなかったものの埋土の状況から判断して赤色顔料が塗布されていたと推定される。確認された埋葬施設は丘陵尾根上のやや西よりに掘り込まれており、本古墳の築造の契機となった被葬者(恐らく成人用)の埋葬施設がその尾根中央部に存在していた可能性もある。また、第3号古墳の位置する場所よりも本古墳が位置する場所はやや高所で、やや広い平坦面を有することから、第3号古墳よりも先行して築造されたと推定される。

以上のことから、時期の不明な第4号古墳を除く2基については概ね5世紀代、第2号古墳が5世紀前半段階、第3号古墳が5世紀中葉から後半に築造された古墳であることが明らかとなった。ところで、県立可部高等学校移転用地内には第5号古墳と第6号古墳が存在している。第5号古墳は南北12.5m・東西10.5mの楕円形墳で5世紀前半頃、第6号古墳は直径12～15mの円墳で5世紀中頃と築造時期が推定されている。出土遺物を見ると、第5号古墳からは短冊形鉄斧と土師器甕が出土しており、時期の推定できる古墳の中では最も古相に位置付けられる可能性がある。第6号古墳からは曲刃鎌と有肩鉄斧と土師器甕が出土している。この土師器については、TK 208型式の須恵器(田辺1966)と共伴した長尾第5号古墳出土土師器(楯木1999)に比べて型式的には古相ではあるものの、その他の遺物から見て5世紀中頃に位置付けられることから、第3号古墳との時間的な差はあまり大きいものとはいえないであろう。また、有肩鉄斧は第3号古墳周辺から出土した有肩鉄斧の形態とは少し異なる。古墳時代の有肩鉄斧を集成した野島永によれば、第6号古墳出土鉄斧は氏のⅡ式に該当し4世紀後葉から5世紀前半を中心とし5世紀後半まで存続するとされ、第3号古墳周辺出土鉄斧は氏のⅢ式に該当し5世紀代に普及するとされる(野島1995)。若干第6号古墳出土の鉄斧の形態のものが先行して出現するものの、時期的には重なる部分も多く、ほぼ同時期と推定される。この第3号古墳周辺出土鉄斧は第3号古墳に伴う可能性が高いことから、第6号古墳と第3号古墳についてはほぼ同時期と考えてよいであろう。

ところで、第2号古墳の築造時期については大町七九谷古墳を参考にして5世紀初頭まで遡らせれば、第5号古墳よりも先行して築造された可能性もあろう。ただ、両者の立地場所をみると、第2号古墳は尾根頂部にあるものの、丘陵の最高所から北側に派生して下る尾根の鞍部に面したその最先端部にあるのに比べ、第5号古墳はその鞍部から再び尾根を上がった標高96mの位置にあり周囲への展望は良好といえる。このことから言えば、第5号古墳が第2号古墳よりも古く位置付けられよう。以上のことから、可部寺山古墳群においては、第4号古墳は不明であるが、概ね5世紀代に断続的に築造されたものと考えられる。築造時期については、第5号古墳、第2号古墳が5世紀前半段階、第6号古墳、第3号古墳が5世紀中葉から後半段階と推定される。なお、第4号古墳は

第3号古墳に先行する可能性が高いので、第6号古墳と第3号古墳との間に位置付けられよう。

ところで、古墳群内の各古墳の立地を見ていくと、第6号古墳は可部の盆地とは反対側の谷地平野に面した斜面に立地するが、その他の古墳は双方の平地を望むことができる尾根頂部に築造されている。ただし、第2号古墳や第3号古墳の立地する場所は、太田川の河口を望む絶好の位置関係にある。このことからすれば、各古墳の築造にあたっては、その多くは可部盆地部よりも反対側の谷地平野や太田川下流域の沖積地を意識して選地された可能性があるのではないかと推定される。

各古墳の被葬者像については、墳丘や埋葬施設、副葬品の状況から見れば、大きく突出した古墳も存在していないことから、他の集団に対して突出した勢力を持つに至らなかった集団の有力者であったと考えておきたい。

以上見てきたように、この度の発掘調査において本丘陵上には5世紀代に築造された5基の古墳が確認された。既存の台古墳や寺山古墳の実態は不明であるが、概ね同様な性格を持つ古墳ではなかったかと推定される。広島市域では比較的発掘調査が実施されている事例の多い太田川下流域のなかで、可部地域ではこれまで福王寺山南麓を中心に横穴式石室を埋葬施設とする後期古墳が100基近く確認され注目されてきたものの、古墳時代前半期の古墳の実態については明らかになっていなかった。この度の発掘調査において中期古墳がまとまって確認されたことにより、本地域も太田川下流域の状況、すなわち5世紀代以降は目立った古墳の姿があまり見られなくなり小規模な古墳が小単位毎に群集して築造されるようになる状況と同様な傾向を示すことを確認できたことは大きな成果と言えよう。今後は、こうした中期古墳の動向が、6世紀後半以降の横穴式石室を埋葬施設に持つ群集墳の築造にどのようにつながってゆくのが次なる課題と言えよう。

2. 焼成施設跡について

本遺構に関しては、前述したとおり火を用いた何らかの儀式的な行為が行われた場所と推定している。ここではその年代観や具体的な性格について、少し踏み込んで検討を加えてみたい。

本遺構の営まれた時期を推定するにあたっては、45点以上が出土した銅銭が好材料である。これらの内、文字の解読できたものは全て中国銭である。中国銭は、12世紀に入って日宋貿易によって国内にもたらされ始め、以後盛んに流通するようになった。本遺構の出土銅銭は、鋳上がり状態の悪さ等から判断して私鑄銭と考えられるが、これが国内に現れるのは15世紀頃からとされている。そして、江戸幕府による慶長13(1608)年の永楽通宝通用停止、寛永13(1636)年の寛永通宝鑄造開始を経て、中国銭は次第に消失していった。本遺構からは永楽通宝が出土していることからすると、本遺構の営まれた時期は、私鑄銭が出現した15世紀から永楽通宝の使用が途絶えた17世紀初め頃までの間と考えられる。

次に、本遺構で行われた行為について考えてみたい。本遺構からは、前述した銅銭に加えて、大量の炭化木材や鉄釘等が攪乱された状態で検出された。炭化物や赤変した礫の存在は、この場所で火が用いられたことを物語っている。さらにこれに鉄釘と銅銭を伴うことから、検出当初には火葬墓あるいは茶毘施設の可能性が考えられた。しかし、墓坑の痕跡やわずかにでも残るであろう骨片が全く検出されなかったことから、本遺構を埋葬施設と位置づけるには無理があるものと判断され

た。次に考えられたのは、宗教的な祭祀の場ではないかというものである。この点については興味深い資料がある。江戸時代に編纂された広島藩の地誌『芸藩通志』によれば、上原村の寺山にはかつて曼陀羅寺という寺院があり、奥坊・浄安寺・竹林寺等十二坊を擁していた。本寺は観応2(1351)年の開基で、一時衰退していたものの熊谷氏が再興し寺領300石を有した。しかし、熊谷氏が毛利氏とともに萩へ移った後は、その庇護がなくなり再び衰えたという。このように14世紀中頃から17世紀初頭にかけての時期、寺山一帯は仏教地帯となっていたというのである。また、この曼陀羅寺の宗派は真言宗、すなわち密教系であったともいわれている(藤井・田村・松岡1976)。さらに前述したとおり、本遺構の営まれた時期は15世紀から17世紀初め頃の間と考えられ、これは曼陀羅寺の存続時期とはほぼ重複する。以上のような状況から、想像をたくましくすれば、中世当時本遺構の一帯には曼陀羅寺に属する仏教施設が設けられており、その一画をなす本遺構において、何らかの儀礼が行われたと考えられる。

以上は、あくまでも本遺構の立地や遺物からの推測であり、確証を得ない。今後の類例の増加を待って、改めて検証すべき事項と考えている。

注

1. 安佐南区権地古墳B主体(檜垣1984)、同池の内遺跡(若島1985)、安佐北区地藏堂山第1号古墳(松村1977)、同可部寺山第6号古墳(渡邊・葉杖2004)、佐伯区月見城遺跡ST5(藤田1987)である。

参考・引用文献

楳木敬太 1999『長尾遺跡』財団法人広島市文化財団

島軒満・鎌田博子 2004『可部寺山第5号古墳・可部寺山2号遺跡発掘調査報告書』広島県教育委員会・株式会社

アコード

田辺昭三 1966『陶邑古窯址群』I 平安学園考古学クラブ

中田昭編 1989『虹山古墳発掘調査報告』虹山古墳発掘調査団

野島永 1995「古墳時代の有肩鉄斧をめぐって」『考古学研究』第41巻第4号(通巻164号)考古学研究会

檜垣栄次編 1984『九郎杖遺跡・権地遺跡発掘調査報告』広島市教育委員会

藤井昭・田村裕・松岡久人 1976「古代・中世の可部」『可部町史』広島市役所

藤田広幸編 1987『月見城遺跡』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター

松村昌彦 1977「地藏堂山遺跡群」金井亀喜編『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会

村田亜紀夫編 1999『大町七九谷遺跡群』財団法人広島市文化財団

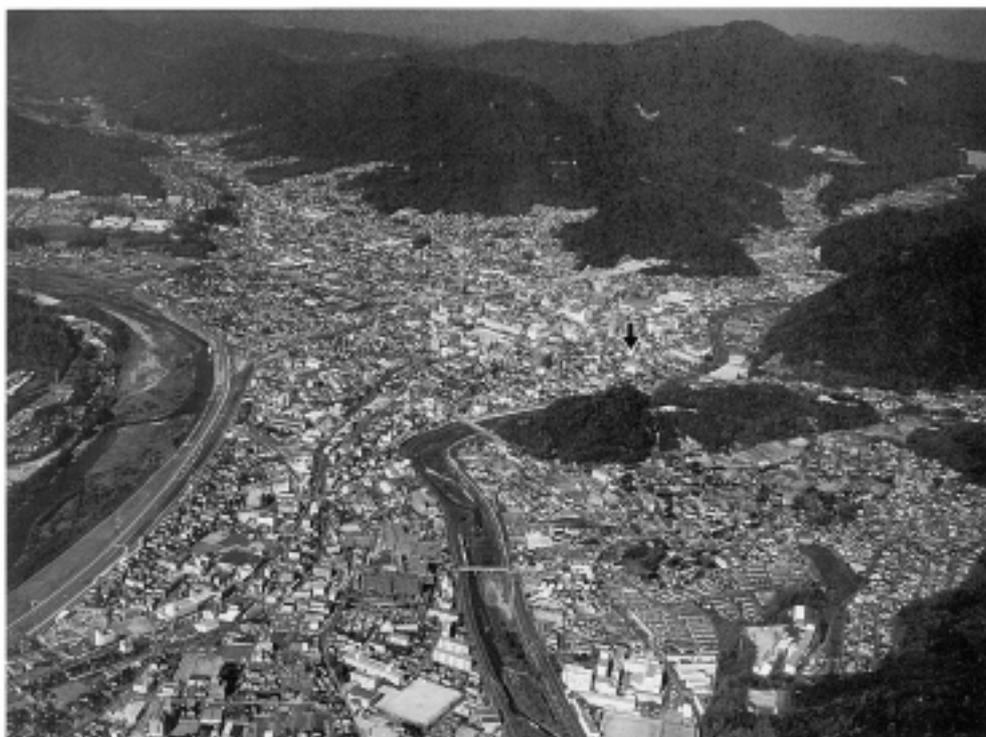
若島一則・中村眞哉 1985『池の内遺跡発掘調査報告』広島市教育委員会

渡邊昭人・葉杖哲也編 2004『寺山城跡』財団法人広島県教育事業団

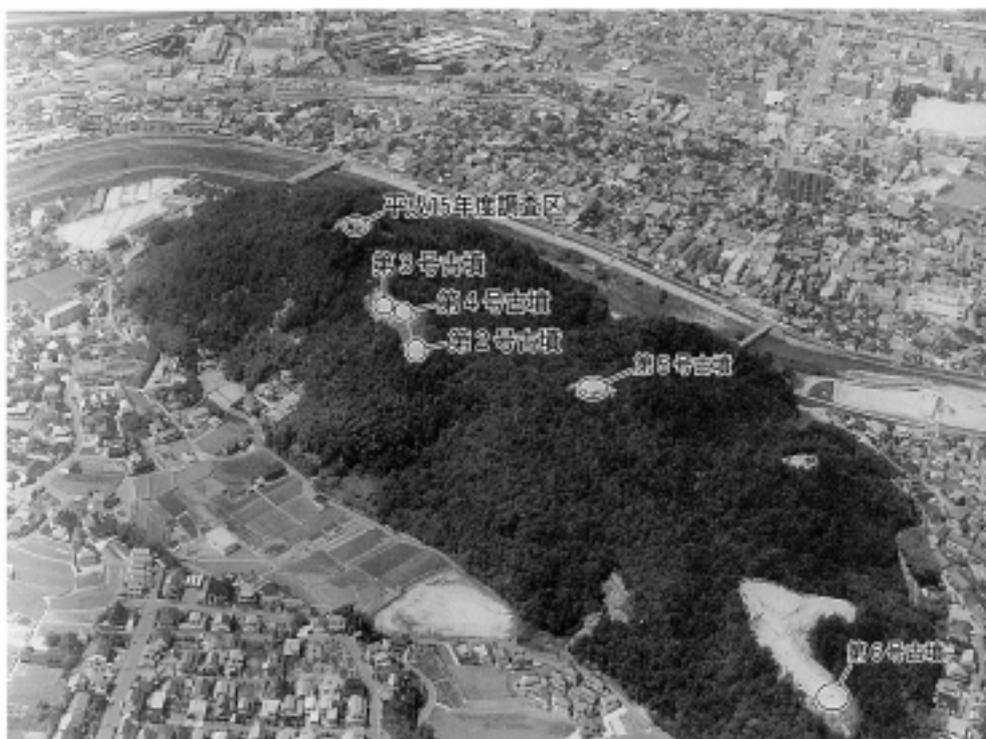
図 版



可部寺山1号遺跡航空写真



a 可部寺山1号遺跡航空写真（南から）



b 可部寺山1号遺跡航空写真（東から）



a 可部寺山 1 号遺跡平成15年度調査区航空写真 (調査前)



b 可部寺山 1 号遺跡平成15年度調査区航空写真 (調査後)



a 可部寺山1号遺跡平成15年度調査区遺構確認状況（北から）



b 可部寺山1号遺跡平成15年度調査区遺構完掘状況（北から）



a 可部寺山1号遺跡平成14年度調査区航空写真（調査前）



b 可部寺山1号遺跡平成14年度調査区航空写真（調査後）



a 可部寺山第2号古墳 (調査前)



b 可部寺山第2号古墳 (調査後)



a 可部寺山第2号古墳（調査後）

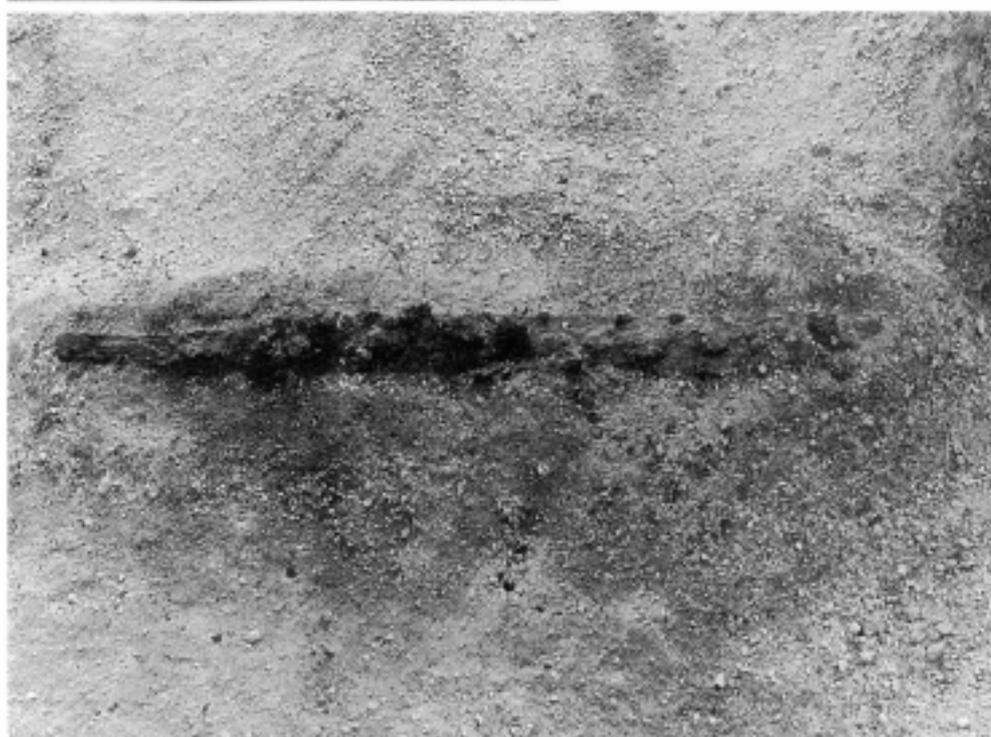


b 可部寺山第2号古墳埋葬施設内出土遺物



a 可部寺山第2号古墳埋葬施設
(調査後) (北から)

b 可部寺山第2号古墳埋葬施設
出土遺物 (一部) (西から)

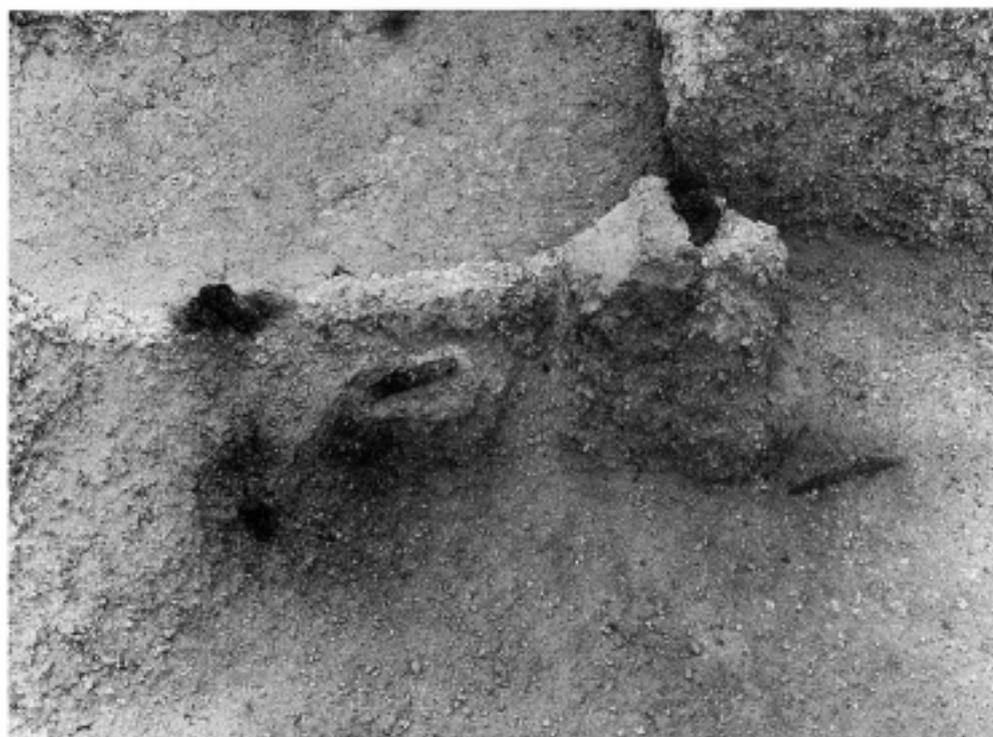




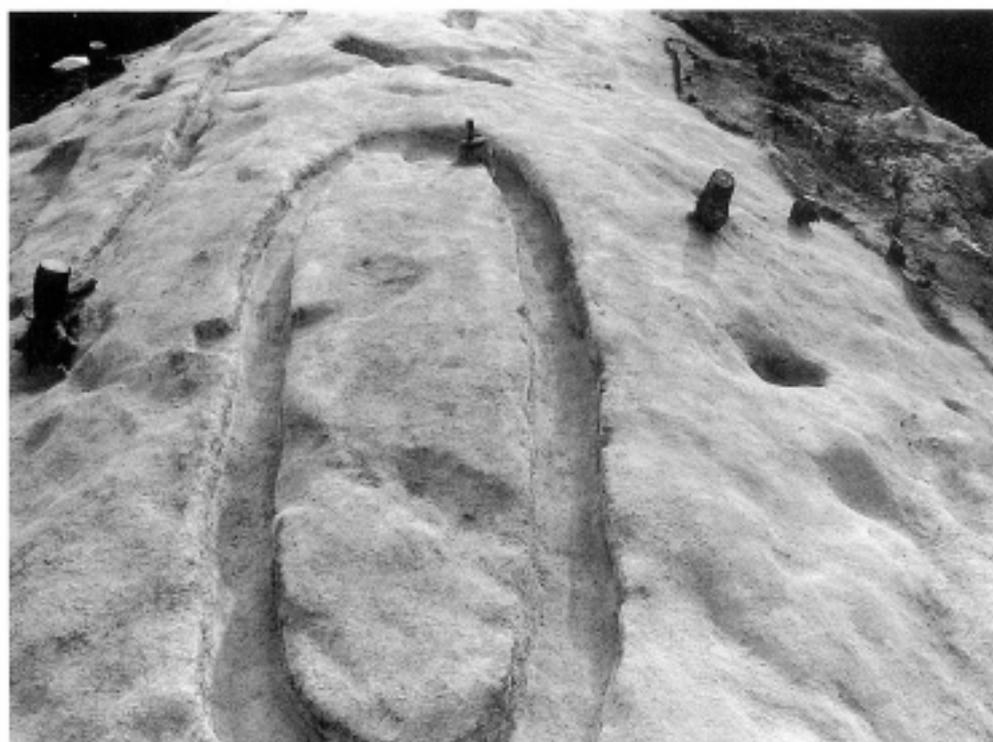
a 可部寺山第3号古墳（調査後）（北から）



b 可部寺山第3号古墳埋葬施設（西から）



a 可部寺山第3号古墳埋葬施設出土遺物（一部）（北から）



b 可部寺山第4号古墳埋葬施設確認状況（北から）



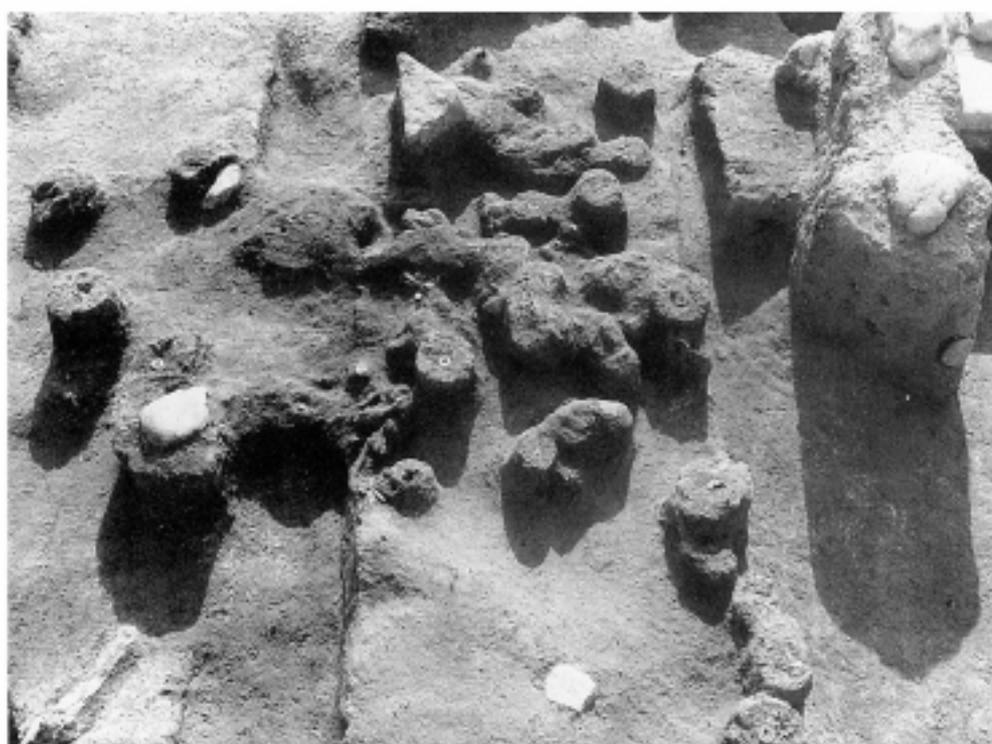
a 可部寺山第4号古墳埋葬施設確認状況（北から）



b 可部寺山第4号古墳埋葬施設（調査後）（東から）



a 可部寺山1号遺跡焼成施設跡（北から）



b 可部寺山1号遺跡焼成施設跡出土遺物（一部）（北から）



a 可部寺山1号遺跡焼成施設跡（調査後）（北から）



b 可部寺山1号遺跡窯跡状遺構（東から）



a 可部寺山1号遺跡窟跡状遺構（調査後）（北から）



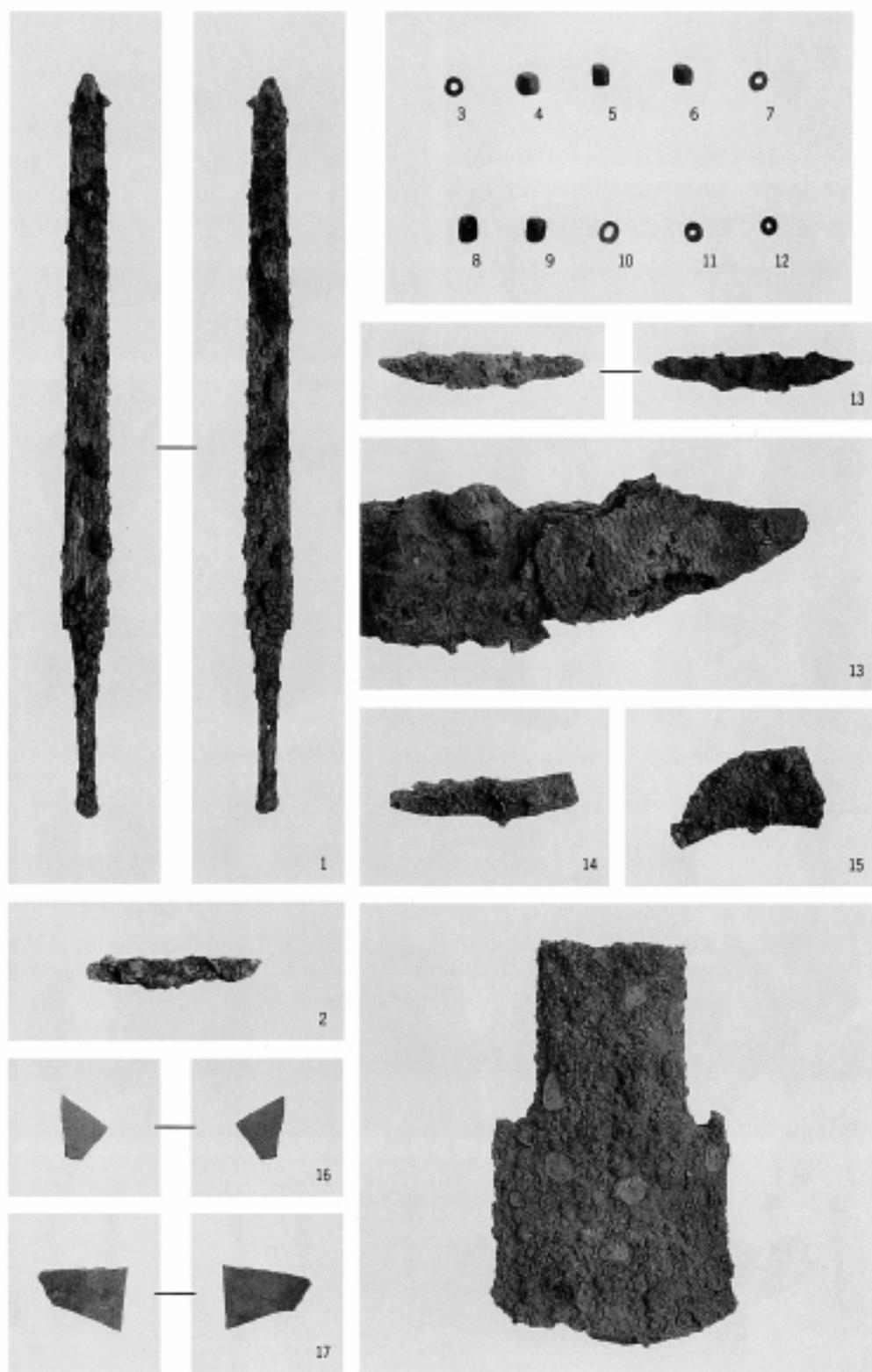
b 可部寺山1号遺跡窟跡状遺構土層（東から）



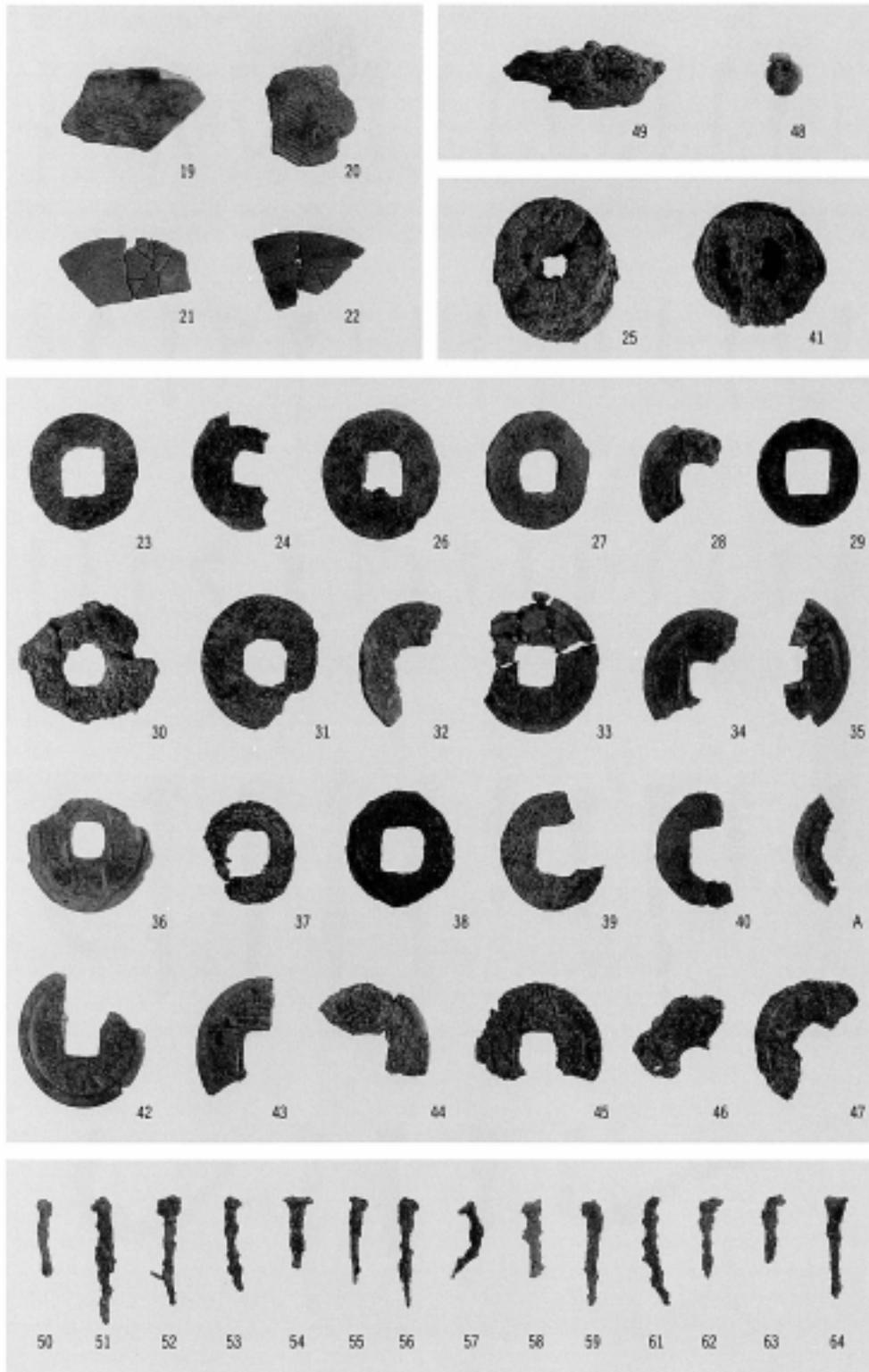
a 可部寺山1号遺跡SK1 (調査後) (南から)



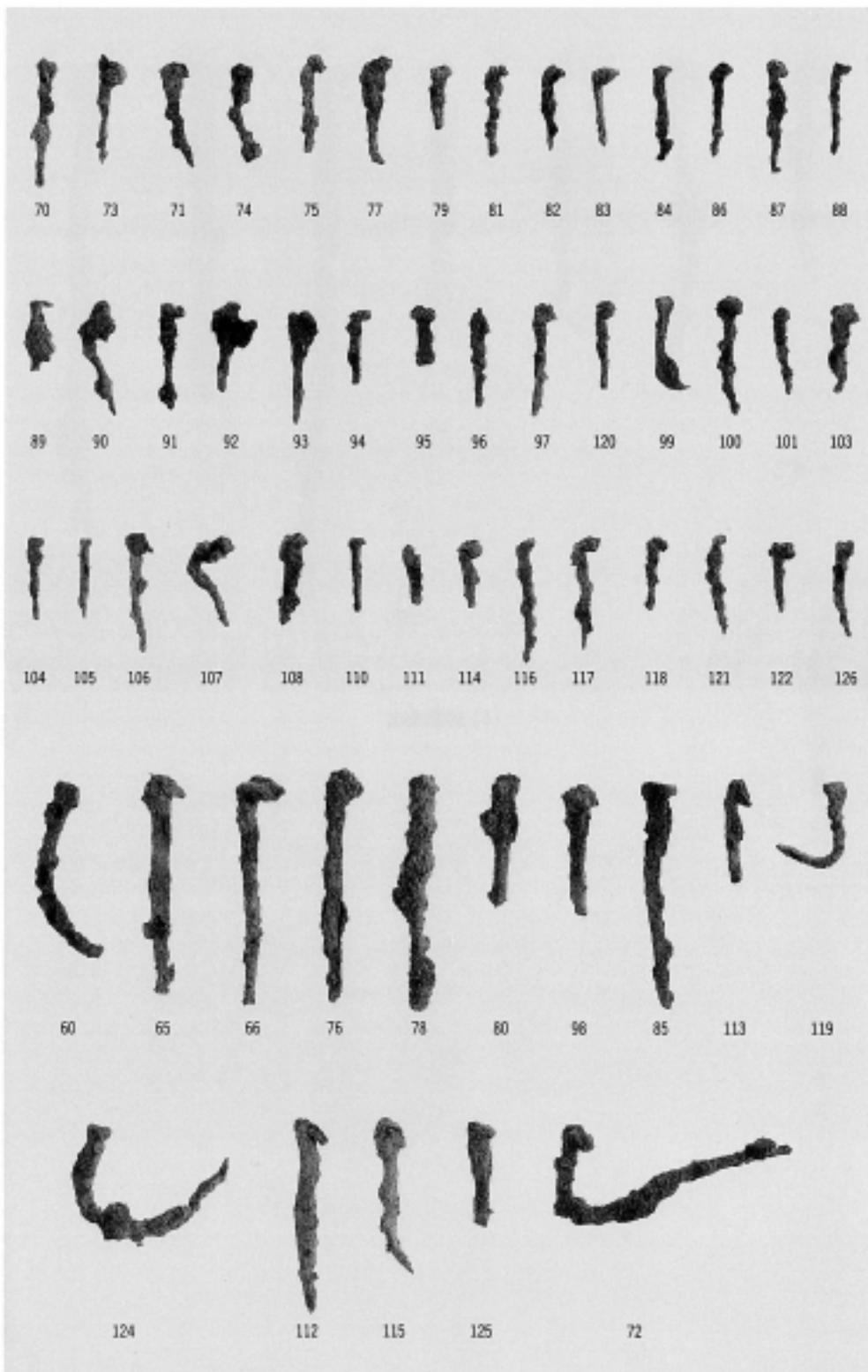
b 可部寺山1号遺跡平成15年度調査区 (調査後) (東から)



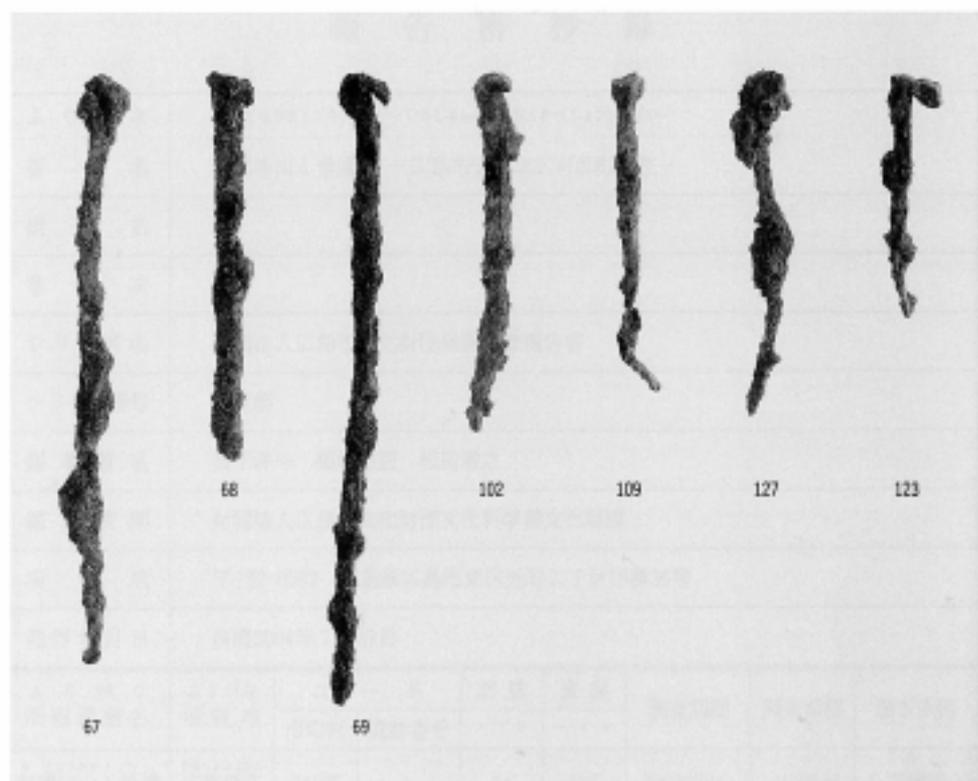
出土遺物 (1)



出土遺物 (2)



出土遺物 (3)



出土遺物 (4)

報告書抄録

ふりがな	かべてらやま1ごういせき -ひろしましあさきたくかべちようしょざい-							
書名	可部寺山1号遺跡 -広島市安佐北区可部町所在-							
副書名								
巻次								
シリーズ名	財団法人広島市文化財団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第11集							
編著者名	高下洋一 稲坂恒宏 松田雅之							
編集機関	財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課							
所在地	〒732-0052 広島市東区光町二丁目15番36号							
発行何月日	西暦2004年7月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° / ′	° / ′			
かべ てらやま1ごうい せき 跡	ひろしまけんひろ 島県広 しましあさ 島市安佐 きたくかべ 北区可部 まち 町	34107	-	34° 31′ 35″	132° 31′ 14″	20030724~ 20041224	3200m ²	公園建設工 事に伴う埋 蔵文化財発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
可部寺山1号遺 跡	古墳群	古墳時代 室町時代	古墳 3基 土坑 2基 焼成施設跡 1基 窯跡状遺構 1基	土師器・須恵器 瓦質土器 鉄製品 古銭		古墳時代中期の古墳 群 中世の宗教関連の焼 成施設跡の確認		

(財) 広島市文化財団発掘調査報告書 第11集

可部寺山1号遺跡

—広島市安佐北区可部町所在—

2004年7月

編集発行 財団法人 広島市文化財団文化科学部文化財課
〒732-0052 広島市東区光町二丁目15番36号
TEL (082) 568-6511

印刷 電子印刷株式会社
〒730-0853 広島市中区堺町一丁目1番5号